
お人よしのオオカミさん

ふちか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お人よしのオオカミさん

【Nコード】

N9675V

【作者名】

ふちか

【あらすじ】

ある日、突然家族を失い田舎で老夫婦に育てられた主人公、春原司狼（すのはら しろう）。

そんな優しい老夫婦も、亡くなりそろそろ自立しようかと思っている矢先

「キサマの力が、必要だ」

とどこからか声が・・・。

じいさんの最後の言葉、

「困っている人がいたら助ける」

という遺言を胸にその呼びかけに応え、司狼は異次元の世界へと旅立つ。

ゝプロローグゝ（前書き）

初めて連載小説を書きます。

なにぶん初めてですので、誤字・脱字が目立ち

文章もつたない感じになってしまっています

自分の文章力も上げる目的で書いていますので、なにかアドバイス
などがあれば遠慮なく申し立ててください

主人公が最強設定です

荒しなどは控えてください

くプロローグく

俺の名前は、すのはら しろう春原司狼。

すこし、わけありの18歳だ。

俺がまだ10歳の頃だった。

その日は、いつもと変わらない日常から始まった。

朝に弱い僕を一つ下の妹がわざわざ起こしに来てくれて、お母さんが作ってくれる朝ごはんを食べて、その後、寝巻きから私服に袖を通し、ランドセルを背負って妹と一緒に学校へ行く。

そして、学校で友達としゃべって授業を受ける。

そんな当たり前の毎日。

妹は低学年だから、四時間目が終わるとすぐに下校になる。

それを「早く帰れていいなあ」と思いながら見送っていた。

日常が壊れ始めたのは、そう、昼が少したった辺りからだった・・・。

突然ドアがバンツと開けられて、血相を変えた先生が飛び込んで来た。

「司狼君っ！急いで帰る準備をしてっ！！早く?!」

先生がなぜあわてているのかわからない。

友達も

「お前なんかやったのか？」

と、茶化してくるしまつ。

わからないながらも、急いで鞆を片付けて帰る支度をした。

先生にそう告げると・・・。

「今からあなたの家に送るわ」

と、理由も告げられずになすがままに帰路に着いた。

家が近づくにつれて辺りが騒がしくなってくる。

救急車やパトカーも何台も走っていて、五月蠅かった。

だけど、家についてみてその理由もわかった。

『春原一家惨殺事件』

当時には、新聞1面にでかかど載ったりしてかなり有名だった。ストレスが溜まりに溜まって、自暴自棄になった犯人が、誰かと心中しようとした先が俺の家だったと言うことらしい。

といっても、その犯人は最後の力を振り絞った父さんに、ぶん殴られて転倒。

そのまま、騒ぎを聞きつけた近所の人が通報して、気を失っている犯人はお縄になったらしい

あの頃の記憶は、大分おぼろげだ。

担架に運ばれていく家族に泣き叫んで近づいていくのを、先生に抱かれて「見ないで上げて！」と抑えられたりして、結局、家族の顔は朝に見たのが最後だった。

幼かった俺はその現実を受け入れられなかったのだろう。

糸が切れたように先生にもたれかかり、何週間か入院していた。

そして、俺が寝ている間にいろいろなことが決まったそうだった。

家族の、葬式はもうやってしまい、俺は家族を見送ることもできなかった。

次に俺の引き取り先。

親戚の中でなかなか手を、引き取るという手は拳がらず、その中で母さんの母親、父親の老夫婦が残りの余生に育てたい。

と、俺を引き取ってくれたそうだった。

そして、俺はじいさん、ばあさんに引き取られ、今よりも実家の田舎に移り住んだ。

じいさん、ばあさんにはすごく感謝してる。

落ち込んでいた俺に、優しく俺に接してくれて、今じゃ俺も元気に生活してる。

だけど、俺を引き取ってから6年後にはばあさんは亡くなり、その1年後、後を追うようにじいさんも息を引きとった。

二人ともやすらかな寝顔だった。

そして、じいさんが最後に残してくれた言葉・・・。

「困っている人がいたら、必ず助ける」

という言葉が胸に今を生きている。

そんな俺も、18歳になり、森の動物や槇割とかしたりして筋肉もそれなりについたし、身長も180cmを超えた。

森の動物の気配を読めたり、狩の腕もかなり上がっていて、じいちゃんがいれば、「一人前になったのう」と褒めてくれるだろう。

そんなんだから、森で猟師として働こうかなと思っていた矢先、どこからか声が聞こえてきた。

『キサマの力を・・・貸してくれ』

得体に知れない声だった。

だけど、助けを求めているなら、応えよう。

それが、どんな存在であつても・・・。

「俺が必ず助けてみせる。だから、俺を使ってくれ」

瞬間、俺の体を光が包み込んだ。

ゝプロローグゝ（後書き）

司狼が異世界へ旅立つというところまでプロローグでした！
次回から異世界編です

まあ、物語は大きくは進みませんね
すみません

なにぶん初めてで、文章にノリがあるませんが、自分の精一杯でや
つていくのでよろしくおねがいします

我が身を犠牲に・・・（前書き）

初めての作品なので、さぐりさぐりやっていこうと思います

つまらんなどの意見も自分を成長させる意見としてとりいねますので、どこが悪いのかなど細かい指摘もしてくださいとうれしいです
誤字・脱字などあれば訂正しますので、よろしくおねがいします

我が身を犠牲に・・・

「ん？ここは？」

光に包まれて、目を開けてみると、ビルほどあるんじゃないかという大木に囲まれているのかがわかった。

こんなでかい木、俺の家の森にもねえぞ・・・。

その大きさに若干気圧された。

だが、反対に木々を掻い潜ってきた風は心地よく頬をなでる。

まるで、落ち着け。

とでも、言うように・・・。

「うん、いい所だ」

思わずつぶやいた。

あまりの心地よさに、光に包まれたとか、ここが何処だとかどうでも良くなった。

まるで、自分と1対となってくれているようだ。

「小僧・・・。ずいぶんと落ち着いているようだな・・・。」

唐突に聞こえた声。

光に包まれる前に聞こえた、弱弱しくも、強く、威厳のある声。

「後ろだ、小僧・・・。」

自分に影が出来たのがわかる。

気配を感じなかったぞ・・・。

少々怖いが、声の通りに後ろを振り向く。

「後・・・ろ?!」

そついわれて、振り向いた先には・・・。

「呼びかけに、応えてくれたことをまずは・・・、感謝・・・するぞ、小僧・・・。」

白銀の毛皮に血を滲ませた、強く気高い狼がそこにいた。

ははっ・・・。

さすがにちよっと、ちびったわ。

イタズラ成功みたいに、口角を吊り上げて、ニヤツとした狼に少し腹が立った。

「それで？あんたが俺をココに連れてきたのか？」

「うむ、その通りだ。我がキサマをこの世界へと誘った。^{いざな}我が名は、フエンリル。フエンと呼ぶがいい」

「おーけい。んで、俺が春原 司狼だ。小僧じゃなくて、司狼と呼んでくれ。よろしく」

最初は驚いたが、落ち着いてみればどうってことはなかった。俺を喰う気はないらしく、かなりの知性があるらしい。

目の前の狼・・・。

フエンは体長は6mくらいだろうか。かなりでかい。

もののけ姫の山犬よりも少しでかいと言ったほうが、伝わりやすいだろうか・・・。

つやつやとした毛は、狼特有、ごわごわしていると思いきや、触れてみるとかなりやわらかい。

自分に意見を許さないという様にこちらを睨むるとい剣幕。

王者にふさわしいほどに堂々とした威厳・・・。

・・・正直に言っわ。

かなり怖い。

正面に立つのでさえ躊躇するほどに・・・。

まあ、いま真正面にいるんですけど。

だけど、気になる点が一つ。

・・・ところどころ、あふれ出している血だ。

一番酷いのは、腹の部分。

周りの毛が焼け焦げており、穴が開いているような傷だ。

フエンも相当やせ我慢をしているのだろう。

普通にしゃべっているように思うが、眉間にはしわが寄り、表情も険しい。

息も荒い・・・。

その視線に気づいたのか。

「我の傷のことは気にするな。もうどうにもならん。死期が近いのもわかってる。だが、心残りがいくつもあるのだ。だから、異世界の住人であるキサマを呼んだ」

「と、いうと？」

「私の呼びかけに応えたということは、いかなる要求も呑むということだな？」

「まあ、そうなるが……。なんだ、傷を治せとかか？」

「いや、さっきから言っているように、もうどうにもならん。正直に言うと、さっきから意識も、朦朧としておる。キサマに頼むのはもっと、別のこと……」

そういつて、1拍おいて、

「キサマには私の力を受け取って欲しい」

「いいよ」

「即答だと?!ゴハツゴハツ!!」

俺の即答が予想外だったのだろう。

弱っているのに、激しいツツコミをして血を吐いていた。

「いや、大丈夫か？」

「ゴホッ、ゴホッ……。キサマ……。得体の知らない力だぞ?少しは迷ったりせんのか？」

「全然。お前が助けろっていうなら、なんであれ。俺は無条件で前を助けるよ?それが、俺の想像を超えるものであっても……」

正直な話。

怖いっていえばうそになる。

だけど、フェンが死ぬ気でものを頼もうとしているんだ。

それを断るなんざ、死んだ時にじいちゃんに殴られちまう。

一瞬、キョトツとした顔をした。

初めての間抜け顔だ。

爆笑してやろうかと思ったが、殺されそうなのでやめとく。だが、すぐにもとの顔に戻って、

「そうか……。お前を選んだのは正解だったようだ。屑みたいなやつだったらこの場で八つ裂きにしていたところだが……」
怖いこといいやがる……。

空気が突然、ピリツとしたものになった。

鳥肌が止まらない。

さっきまで、心地よかった風がやみ、さわさわと音を立てていた木々の音もやんだ。

完全な静寂の世界。

もちろん、そんな世界を作り出しているのが、目の前のフェン。さっきまでの雰囲気完全に消し去り、へたっていた毛も逆立っている。

「小僧……。我も限界が近い。手短に話すぞ。キサマに受け継がれるのは、我の力……。力といっても純粹な筋力だが……。それと、センス……。この二つが人を凌駕する。本当は魔力も渡してやりたいが、あいにく、我の魔力が高すぎる故、人のみであるキサマの器がもたん。それと、キサマの体にも変化が起こる。我を引き継ぐことによつて、人よりも我ら『天狼族』……。我らに近い存在になる。といったところだ。何か、質問はあるか？」

「俺、この世界についてなんにもしらねえんだけど……」

おい、その狼。

しまったみたいな顔すんな。

「すまんが、そういうことは、娘に聞いてくれ。これが終わるまで、周りで見張りをさせている。終わればいろいろなことを教えてくれるだろう。心残りとは、娘のこともある……。頼んだぞ」

「了解、俺からはもうねえよ」

「そうか、では……。いくぞっ!!」

フェンが、空に向かって遠吠えをする。

すると、空から魔方阵のようなサークルが現れ、俺とフェンを囲った。

空気が張り詰める。

『我、天狼王の名において！』

「なんだろう、圧倒的な存在感を放っていたフェンの空気が薄くなっている。」

『若き勇者の力にならん！』

フェンが、呪詛を唱えていくにつれて、俺の頭の奥がピリツと痺れる感覚がよぎる。

『私の命を糧として！』

痺れる感覚が、だんだんと痛みへと変換されていく。

「グッ……！あぁっ？！」

あまりの痛さに、頭を抱える。

だが、痛みが和らぐことはない。

「ぐうううっ？！」

その様子を、フェンは血が滲むほどに歯を食いしばり眺める。

「すまん、小僧。これで、最後だ……。」

『私は勇者の血となり、肉となるっ！！！』

「あああああああっっっ！！」

痛みが頂点を越えた。

フェンが、呪詛を言い終わった途端、頭が焼ききれるんじゃないかという痛みが襲う。

「頼んだぞ……司狼……」

意識を手放す前、フェンのそんな声を聞いた気がした。

ペロツ、ペロツ

ざらざらした生暖かいものが顔をなめている感触がする。

「うん……ん？」

目を開けてみると、フェンが俺の顔をなめていた。

……いや、フェンにしては小さい。

比べ物にならないほどに小さい。

1m60・・・ほどだろうか。

俺よりも、小さい狼がそこにいた。

目の前の狼の頭に手を載せて、うりゃうりゃと撫でてやると、うれしそうに顔を摺り寄せてきた。

「かわいいなあ・・・」

おもわずつぶやいてしまった。

だが、褒め言葉だとわかったのか。

「くぅん」

とさらに甘えるように擦り寄ってきた。

ずっと、こうしているのも良かったが、フェンのことが気になる。

痛む頭を叩き起こして、キョロキョロとフェンの姿を探す。

いた・・・。

見つけた・・・。

「フェン・・・」

よろよろ立ち上がる俺を心配してか、狼が支えになって歩かせてくれる。

どうにか、フェンの近くまで歩いていく。

そして、フェンを見上げて立ち止まる。

「あんた・・・かつこよすぎるだろ・・・っ!!」

知らず知らずに声は熱を帯び、目頭に熱いものがこみ上げてくる。

俺の視線の先には、死して尚も王者の貫禄を見せつけ、決して倒れるのよしとしない王の姿がそこにいた。

「本気で尊敬するよ、フェン」

俺はこの世界で始めて泣いた・・・。

我が身を犠牲に・・・（後書き）

すみません

ながながと書いてしまいましたw

フェンと司狼の出会いでした。

どうでしたか？

まだ、冒険にでていませんが、感想などがあつたら遠慮なくしていつてください

誤字・脱字はすぐに修正します

では、これからもよろしくおねがいします

褒められるのはNG（前書き）

まだまだ、森から抜け出しません
進行が遅くてすみません

やりたいことが多くて、大変です

まあ、作者の力不足なので罵ってやって下さい

後、主人公のキャラが崩壊していきます

最初からそんなキャラにしようとしたら、シリアス方向に行つてしま
まい真面目キャラに・・・

ご了承下さい^^

褒められるのはNG

ああ、泣いた泣いた・・・。

こんだけ泣いたのも久しぶりではなからうか。

俺が泣いている間も、狼は離れていかず、ずっと近くにいてくれた。ありがとな、という思いも込めて頭を撫でてやった。

ごろごろと甘えた声を出して、喜んでくれている。

「さあて、それにしてもフェンをどうするか・・・」
なにしろ6mの狼だ。

それに、個人としては埋めてやりたい。

「しょうがない・・・。墓を掘るか」

そういつて、フェンの体に触れようとしたとき、

ガブリっ。

は？

狼が腕に噛み付いてきた。

「ちよっ、ま?!」

「グルルルルッ!!」

低く声を唸らせている。

まさか・・・。

「このままにしておけと?」

腕に噛み付いたままコクンと頷いた。

「いやっ・・・でも・・・。・・・いいのか?」

「わふっ」

当たり前だというように、ないた。

・・・まず、その噛んでいる腕を放して欲しいがな、わんこっ。
俺がフェンに触らないことがわかったのか、腕を放してくれた。

とりあえずフェンの亡骸から離れ、近くにあった切り株に腰をかけた。

まずは、この狼さんと会話してみよう。

「えーと、まず君がフェンの娘さん・・・でいいのかな？」

こくんと頷く。

「俺、君からこの世界の事とか聞けといわれたんだけど、君しゃべれる？」

眉間にしわを寄せて、しまったと言う顔を器用にする。

フェンもそうだったけど、動物も表情を作るんだな。

そんなことより。

「もしかして、しゃべれない？」

ふるふると顔を横に振る。

「それじゃ、どうやって？」

狼は、迷ったようなそぶりを見せ、数歩下がった。

そして、狼の体に変化が現れる。

まず・・・立った。

二足で・・・。

その後は体に変化が現れる。

今まで、狼を覆っていた毛は、なりを潜め血色のいいピンクの肌が見え始めた。

指は、3本から5本へ。

そして、体は、ぷるんつと形のいい胸が突き出し、出るところは出て、引つ込むところは引つ込んでいる世界中の人がうらやましがらないかというほどに理想的なスタイルに。

そして、狼だった顔は、口がだんだんとへこんで行き少々目つきはきついが、美人に入るだろう整った顔になった。

そして、スタイルも顔でさえもどうでもいいと思ってしまうほどの、白銀の髪。

風に吹かれて、なびくたびにあちこちが光ってさえ見える。

俺は完全に彼女の一拳一動に魅了されていた。

だけれが、見ていればアホ面で笑われるだろう。

「くすっ、変な顔をしておられますよ？これで大丈夫です。話せま
す」

あなたがいましたね。

しかし、ニコツとした顔もきれい、いや可愛い、いやかつこいい？
なんでもいいや、とにかく何でも当てはまる。

そんな、彼女に俺の目は完全に釘付けだった。

「あの・・・そんなに見られるとさすがに恥ずかしいのですが・・・
」

といって、身をよじる。

そう、彼女は変身？した後だから裸。

しみ一つない肌。

だからだろうか？

「きれいだ・・・」

俺は無意識のうちにつぶやいていた。

すると、ピシッ、彼女の表情が固まった。

クルッ↑彼女が後ろを向く

ダッ↑脱兎のごとく駆け出した

「ーーーーっ！」

「え？！ちょ・・・まっ！！逃げるの？！見られてたのは大丈夫で、
寝めるのはダメ？！その前に、服っ服着てーーーーっ！！」

見れば走り去る彼女の顔が赤い。

りんごのようだ。

褒められるの苦手なのか。

じゃなくて！！

追いかけないと、見失うつ！！

「待てーっ！俺が悪かった！！話を聞かせてーっ！」
俺も彼女を追って、森に入っていた。
フェンの亡骸が苦笑いしていたように見えたのは、気のせいだろうか。

褒められるのはNG（後書き）

テスト期間中で、更新が遅れましたすみません

この森の中で結構、重要なことをやっていくのでなかなか冒険にできません

ついでに言うと、まだこの世界のこともまったく話していませんよね・・・

文章がへたでもうしわけないです

ここまで読んでくれた方感謝感激です

これから更新は、毎週土曜日にしていこうと思います
今週はもうしましたが・・・。

まあ、できればやっていきたいです

また、面白かったなどなんでもいいので感想をいただけるとテンションも上がって、喜びます

誤字脱字などがあれば遠慮なく言ってください
それではっ！

拾ったものは食べない(前書き)

相変わらず話が進みません

コメントや、お気に入りにしてくれた方かなりうれしかったです
よろしく願います^^

拾ったものは食べない

彼女が走り去って、後を追ったがさすがは狼といったところか……。『ちくしょ……。見失っちゃった……。』

早かった。

振り返りもせずに、向こうも全力で走っていたから、俺も全力で追いかけたが、瞬く間に差は開いていつてついに見失った。しかし、少し違和感があった。

「息が切れてない？」

あれだけ、全速力で走ったのにも関わらず俺は、息一つかいていない。

まだウォーミングアップもできていない。

すこしあったまってきたぐらいの感じ。

これも、フェンから授かった力的一端だが……。

「ここ、どこだ？」

そう、正直に言おう。

迷った。

猟師をやっている森に慣れているが、いかんせん。

ここは知らない森。

どうやったら、フェンのところまで帰れるのかさえわからない。

なにか食べようとしてもそこに生えている青のかさに、白い斑点があるキノコなんて怖くて食べられない。

ぐう。

……腹が減ってるんだからしょうがないじゃないか。
このままじゃ、餓死で死んでしまう。

しょうがない。

背に腹は変えられない。

安全そうなキノコを食べようじゃないか。

そのキノコは、茶色でさつきから見える青いキノコのように斑点もない。

においをかいで見ると、甘い香りが鼻を刺激した。

うん、これなら食べられそうだ。

俺は、キノコを口に運び、食べた。

においからの想像通り、甘い。

噛めば噛むほど、甘みが増していき頬がつり上がって行く。

「ははっ！ハハハッ！ハハハハハハッ！！」

おかしい！！

笑いが止まらない。

んな、漫画みたいな展開。

笑い苺とかあるのかよ！？

こうして、思案している間にも笑いが止まらない。

しかも、全力で笑っているから腹筋も痛い。

その時、後ろの茂みから、ガサツと音がしてフェンの娘さんが飛び出してきた。

「探しましたよ！？どこに行ってた……笑い苺を食べたんですね……」

……」
逃げたのは君だろう。

だが、今はツツコム余裕さえない。

「そうそう！！笑いが……ハハッ！止まらない！！」

「わかりました。少し待っていてください。直ぐに薬草と食べ物を持ってきます」

それから俺は笑い続け、娘さんが戻ってきた頃には乾いた笑いで、

「ははっ……」

と迎えてくれてかなり焦ったそうだ。

途中から笑いすぎて意識が飛んでた。

今回の教訓――よくわからないものは食べない。
ホントに気をつけてね。

拾ったものは食べない（後書き）

こんばんわっ

すみません、夜中の更新になってしまいました

まあ、なかなか物語が進みませんね……

なので、2話同時投稿します

それでは、次の話しへGO！

例のごとく、誤字脱字があればよろしくお願いします^^

譲れないもの（前書き）

ここでいろいろ説明します

まあ、いろんなことが分かります

だから、どうか飽きずに読んであげてくださいw

譲れないもの

あれから、フェンの娘さんーアルセーは持ってきた薬草を煎じてくれてのませてくれた。

そして、現在この世界についていろいろなことを話してもらっている。

話し方は、アルセは敬語だけど俺はいつも通りに話してる。

「……。ここまで、よろしいでしょうか？」

「うん、大体わかった」

とりあえず、最初にいた場所……フェンのところまで戻って二人して、座って話している。

ちよこんと俺の前に座る、アルセはかなり可愛かった。

なんていうの？

小動物？

そんな感じ。

あと、服は着てもらった。

まあ、俺の上着を羽織ッてるだけだけど、さつきよりはまし。

まともに見れなかったもん。

まあ、それはおいおい置いといて。

アルセはいろいろ話してくれた。

まずこの世界の名前。

『クラシーブ』

というらしい。

話を聞く限り、俺のいた世界とは圧倒的に違っている。

さつきのキノコ然り、種族も人間もいるにはいるが、エルフや魔族、竜人族に獣人族、そして……フェン達”天狼族”。

天狼族は、種族の中でもかなり、ランクが高いらしく。

あるところでは畏れられ、あるところでは崇められている種族らしい。

そして、この場所。

『白銀の森』

といい、代々、天狼族が守護しており、緑が豊か。また他の種族に荒らされたこともない神聖な森らしい。それを語っているアルセの顔はどこか誇らしげだった。

「豊かだから、危険な魔物もたくさんいますよ？」

といわれたときに、「俺、遭遇したことないけど？」と聞いたら、

「今は私が周りを警戒してますから、それに父の骸もありますし。」

それと、逃げる……時には、魔物がいない道を選んでいましたから。そう語る彼女の顔は少し赤かった。

そうか、この親子に守られているのかと安心させられたこともあった。

そして、まだ話は続いている。

「そして、本題の、”なぜあなたに力を授けるにいたった理由”……

……。それは、父がこの世界のことを好きだったからです」

黙って聞く。

「父は言っていました。『我はこの世界が気に入っている。だから、我は守りたいのだこの世界を……』と。もう、自分の力が世界を救うことが出来ないのがいやだったのでしょう……。自分の志を受け継いでくれる方を最後に探していたのです」

「それが……俺？」

「はい、司狼さん。父は最期に魔力を振り絞り、異次元からあなたを手繰り寄せたのです」

フェンが俺のことを呼び寄せた理由。

”世界を守りたいから”

どうして、あの人はそこまでかっこいいのだろうか。

俺は、フェンの志を深く心に刻んだ。

だけど、理由はそれだけではないだろう。

おそらく俺の目の前にいる人。

アルセ……。

フェンの娘。

娘を一人置いて、逝きたくなかったのだろう。

それほど、心配だったのだ。

だから、俺を呼んだ。

おそらく、理由はもつとある。

だけど、それは知らなくていい。

この二つだけで十分だ。

「そして、父を殺した種族は……龍族……」

彼女は抑揚のない声でつぶやいた。

今までの彼女からは想像できない冷たい声・

「龍……族？」

「はい、この世界には先ほど申した通りいろいろな種族がいます。

そのなかでも、一際、凶暴、荒くれ者が多いことで有名な龍族。龍

族には、自己中心的な考えを持つものが多く、”気に入らない”、

”うるさい”といったくだらない理由で一国と戦争を起こすことも、

多々あります。

しかし、まだ、力が弱いというなら話は変わってきたのですが……」

そういつて、言葉を濁した。

「もしかして、強いのか？」

「その通りです。龍族はかなりの魔力や力を持っており、種族ごと

にランクがあるのですが、龍族はSランクに属しています。そして、

私達、天狼族はAランク。Aも十分に強い部類に入りますが、S

ランクまで行くと、伝説級。強さが桁違いなのです」

世界のことをか教えてくれていたときとはちがい、弱弱しく言葉

をつむぐアルセ。

龍族の話になると、とたんにうつむいてぼつぼつと話している。

「フェンを殺したのも、龍族だってこと？」

「はい……そうです」

「そんな……」

驚愕した。

あの強そうなフェンでさえも殺した、龍族。

「どんなやつなんだよ……」

「父の一番酷い傷。おなかにある傷は、龍族の炎のせいです。龍族は炎を自由に操ることができ、父を貫いた炎は”炎槍”というらしいです」

今度は憎憎しげに吐き捨てるような言葉。

憎いのだろう。

父を殺したやつを。

俺だってそうだ。

家族を殺した犯人をどれだけ殺そうと思ったか。

夢まで見て、何度犯人を殺したか。

―何度も何度も何度も、犯人に刃物を突き刺し、家族の苦しみを味合わせてやろうと思ったか。

家族を失った悲しみは計り知れない。

「それでも、なんとか父は撃退することが出来ました。自分が傷ついても、この森や私を助けようとして……」。

まだ、縄張り争いだったなら、私もすくなくならず納得できました。

しかし、あいつが言う理由は”ゴミ掃除”……だそうです……。目障りだったのでしょうか、父が……」

今、何て言った？

その言葉を聴いた途端、血液が沸騰しそうになった。

自然と歯を食いしばり、拳は血が滲むほどに……。

強く、強く握り締める。

「ゴミ……だと……!？」

「俺に人生を託した狼を。」

「誇り高き狼を。」

「優しくかった狼を。」

「ふざ……けるなよ……っ！」

あの人をゴミだと？

俺の人間としての理性に歯止めが利かない。

見たこともないやつに憎しみが募る。

コインでタワーをつむがごとく、どんどん高くなっていく。だけど……。

握り締めていた手を暖かい手が包み込んだ。

「アルゼ？」

彼女は俺が握り締めている拳を優しく、優しく解き始めた。目の前に彼女の顔がある。

先ほどまでとは、違った優しい顔。

「ありがとうございます。司狼さん。父のためにこんなにも怒ってくださって……」

ちがう。

「父があなたを呼んだのは正解だったようですね」
ちがう……。

「私も嬉しいですよ」

ちがう……！！

「私も悲しいですがー」

「ちがうっ！！」

俺は、彼女の方をガシッと掴んだ。

自然を掴む手にも、力が入る。

「いたっ！痛いですが、司狼さん！離しー」

「嘘を……つくなっ！！」

痛がってもがいていた彼女の体がビクッとはねた。

「嘘をつかないでよ、アルセ！悲しいんだろ！？フェンが居なくなつて……。なんで、そんな嘘つくんだ！！なんで、わらってるんだよ！！」

「何を……」

「アルセ、我慢してる。泣くことを我慢してるだろ！本当は泣きたいのに我慢してる。悲しいなら泣けばいいじゃないか！！」
彼女はうつむいた。

「私はお父さん……からあなたのことを任されてます。あなたを不安にさせることは出来ません」

フェンに俺のことを任されてるのか？
だったら……

「だったら、俺だって君のことを任されてる！フェンから」娘を頼む”つて。だから、君が悲しいなら俺は助けなきゃ、いや助けたい！フェンのお願いがなくなつて、君を助けたいんだよ！！」

じいさんが最後に残した言葉。

”困ってる人がいたら必ず助ける”

フェンが残してくれた。

”娘を頼む”

二人の言葉が俺を強く動かす。

目の前の、彼女はまだ吹っ切れてない。

悲しみを、心の奥深くに閉じ込めている。

そんなんじゃ、前に進めない。

過去の人にこだわっていたんじゃ、いつまでたってもその場所にいる。

俺だってそうだ。

いつまでも、家族にこだわっていた。

そのせいで、いろんな人に迷惑をかけた。

友達にもじいさん、ばあさんにも……。

だから……。

俺は肩を掴んでいた手を離し、代わりに腰に手を回し彼女を抱き寄

せた。

抱き寄せた拍子に、彼女の髪が鼻を掠める。

―甘くて優しい香り。

そして、華奢で小さい体。

「叫んでごめん。だけど、悲しいなら泣いていいんだよ。俺はそれを迷惑だなんて思わないから……」

優しく、自分の思いが彼女に伝わるように……

「俺はフェンのことが大好きだよ。もちろん、アルセも。だから、笑って欲しい。無理に作る笑顔じゃなくて、本当の笑顔を……」

……俺、今すごい恥ずかしい言葉をいつてるんじゃない。

まあ、本当のことだからいいか。

アルセの手が俺の背をギュツと掴んだ。

振るえている。

「……私……泣いて、いいんでしょうか？」

「……うん」

「なら……すみま……せん」

彼女は俺の胸に、顔をうずめて小さく泣き始めた。

その小さな体で我慢していたのだろうか。

俺は、アルセの髪をできるだけ優しくなでる。

「うう……ぐす……うあ……ああ……」

先ほどとは違って、穏やかな時間が流れている。

「すみません……お見苦しいところをお見せしました」

あれから結構な時間泣いていた。

アルセの目は真っ赤になっていた。

「アルセ……」

落ち着いたのを、見計らって声をかけた。

「なん……ですか？」

「さっき、フェンのこと”お父さん”って呼んだよね」

「え!？」

そうアルセはフェンのことを”父”と呼んでいたはずだ。

このことが指す意味は……。

「俺に敬語なんて使う必要はないか？」

「しかし……」

「俺とアルセの間でそういうのはなし、お互い自然体で行こうぜ？」
きょんとした顔でこっちを見ている。

すると、今までの中で一番いい笑顔で……

「分かった!!」

やっぱり、この子可愛いわ。

これで、いいんだよな。

じいさん、フェン。

どこからか

『よくやった』

なんて声も聞こえたり、聞こえなかったり……

譲れないもの（後書き）

ながながと申し訳ありません

やっとこの世界についての話を出来ましたw

と、いうかちよつと急展開でしたかねえ？

無理やりもっていった感が……

そして、アルセは本当は活発な子です

どっちかというと天真爛漫？

次からは打ち解けた二人が、旅にでる準備をします

やっとなつぎで終わりですか？

どこか矛盾点や誤字脱字などありましたら、修正しますので言っ
て下さい。

また、感想なども待つてます

次の更新は、火曜日くらいになります

それでは！！

あと、アルセの狼状態の時2mと書きましたが修正して1m60ほ
どということに直しました。

司狼が180くらいで、アルセが人間体になっても司狼の方が大き
いです。

よろしくおねがいします^^

決意（前書き）

結構、長くなってしまいました

森編終了までこれをあわせて後、二話！

駄文ですが、見ていってください

いろいろ小説読んで、表現の仕方を学びたいとつくづく思った話です
ね

決意

フエンから力を貰って一週間が流れようとしていた。

あの後、直ぐに旅に出るのかと思いきやそうではないらしい。

ある程度は”天狼族の力”に慣れて欲しいということで、この白銀の森で生活する羽目になった。

この森で、生活していて改めてこの森が豊かなのだと思い知らされた。

日光を反射してきらきらと光る湖に、その中をゆらゆらと優雅に泳ぐ魚達。

森全体は明るい新緑の色で彩られ、風が木の葉を揺らすと木漏れ日が心地よい光をくれた。

そして、草食の魔物は草を食べ、肉食の魔物は草食の魔物を食べる。

そのの食べ残しを鳥系の魔物が食べ漁り糞を出すと、草へと帰る。完璧な食物連鎖だった。

まだ他の種族に、荒らされたことがないのが、ありありと分かるこんな所で生活できたことを、俺は一生の誇りに思うだろう。

そして、アルセはここで生活する間にある条件を出した。

それは”グルズを倒すこと”だ。

”グルズ”とは何か？

そう思うだろうか。

そうだなあ、元の世界で言う熊を思い浮かべてくれたほうが、想像しやすいだろうか。

といっても、熊とは比較にできない。

全身が黒の毛皮で覆われており、四肢も丸太のように太い。

そしてやっかいなのは、その巨体と爪。

”グルズ”は体長が3mもあり、俺の身長を軽く越す。

やつが立つと、二人分くらいの日陰が出来るほどだ。

そして爪。

”グルズ”の爪は、この世界で強く生きていくために、鋭くとがっており、触れたものをいとも簡単に切断する。

想像してみたい。

”グルズ”が俺の目の前で、獲物を真つ二つにした様を。戦慄したよ。

そして、アルセはその”グルズを3体を倒すこと”をノルマとした。少しでも、天狼族の力に慣れて欲しいらしい。

そして、一日目は初めてと言うことで、いろいろなことを教えてもらった。

まずは筋力。

ために、俺の倍はあるかという巨大な岩を持ってみてと言われたので持ってみると、簡単に持ち上がった。

まあ、その後に片手でも十分に持てた自分に、戦慄したが……。

そして、聴力・脚力などいろいろなものを試してみた。

全てが人間を超えていた。

遠く離れた音を聞き分ける耳。

夜中でも昼間のように明るく見える目。

アルセと並んで、走られるような足。

一つ一つ確かめていく内に、俺は人間をやめたんだと少し寂しく思った。

そして、”グルズ”狩りが始まった。

一日目

「いい？司狼、まずは……あたって砕ける！だよ？」

「まてよ、おい」

俺達の間には、敬語はなくなっていた。

話してみると、明るい子で知らずの内に打ち解けていた。

いろいろ確認した後に、

「付いてきて」

と言われて、すたこらさっさ歩くアルセに付いて行くと、目の前には話題のグルズが居た。

今は、こっちが草むらに隠れているおかげで、まだ気づかれてはいない。

そしてこの台詞である。

「無理無理無理っ！！なにあのでかい毛むくじゃらっ！俺よりかいでしょ！？」

「もゝ、わがまま言う子には……えいつ！」

小さい掛け声と一緒に、俺を小さな手が押した。

「てめっ」

がさつと一人、草陰から飛び出す。

「あははっ……」

すでにグルズはこちらに狙いを定めていた。

「グルオオオオオオオオア！！」

ビリビリと肌が打ち付けられるような、咆哮。

「うあああああ！」

一日目は、自慢の足で逃走した。

アルセが、肩を竦めてやれやれというポーズをしていたのを、視界の隅で捕らえていたが、そんなことは気にしてられない。

自分の命一番！

く二日目く

二日目も、草陰に隠れグルズの様子を伺う。

「今日は大丈夫？」

アルセが心配そうに、こちらの顔を覗いてきた。

このアルセ、俺が逃げていたグルズを一発で仕留めた。

この小さな体の何処にそんな力が……。

「まあ、さすがに昨日みたいなのはしないから落ち着いたら出て

行ってみて？」

「昨日は少しふざけてたんだな？」

「あはは……」

「俺の目を見る、目を……」

だがいつまでも、こうしてるわけにはいかない。

落ち着け……。

深呼吸だ。

吸って、吐いてを繰り返す。

……よし落ち着いた。

正直まだ怖い。

吼えられただけで、俺は逃げ出したのだ。

正面に立てるか……。

考えててもしょうがない！

今度は自分の意思で、草陰から出る。

すると、直ぐにグルズは俺の気配に気づく。

そして、息を大きく吸い……

「ごああああああ！」

体が痛い。

鳥肌が止まらない。

だけど、そこから逃げない。

逃げ出さない。

情けないまねは……しない！！

グルズの咆哮が止まる。

ふう、額から流れた汗を拭う。

ここからが本番だ。

グルズは既に臨戦態勢になっている。

俺もいつ襲ってきてでもいいように身構える。

「ゴルア！」

来た！

真っ直ぐにこっちに向かい、その逞しい腕を横に一線する。

それを反射で、しゃがんで避ける。

髪の毛の先が、風に乗って飛んでいったが気にしない。

少しでも油断するとアウトだ。

そして、また横なぎに一線。

今度はよく見て、避ける。

（こっちの番だ！）

俺は避けた勢いで、一気に懷に飛び込む。

「グルウ？」

予想外の動きだったのだろう。

一瞬、動きが停止した。

俺はその隙を見逃さない。

すかさず懷に飛び込み、打ち上げるように拳を突き出す。

グシャア、といやな音がした。

おそらく、中の内臓やらがつぶれたのだろう。

グルズは口からよだれを大量に垂らし、それは糸を引いて地面へと垂れる。

やがて、ビクンっビクンっ と痙攣し始め、やがて息絶えた……。

まさか、一撃で倒せるとは思っていなかった。

打ち込んだ後は一旦引いて、ヒット&ウェイを繰り返そうとした。けど、一発。

それほどまでに、人間離れた力。

そして……俺は殺してしまった。

そんなつもりはなかったのにだ。

俺は、両親を殺した犯人と同じことをしてしまった。

もしかしたら、こいつにも家族が居たかもしれない。

そうしたら、残された親兄弟は？

殴った右腕の感触が、俺の罪の意識を再認識させる。

俺と同じだ……。

魔物も、俺も。

すると、アルセが近づいてきた。

「お疲れさまっ」

ひまわりが咲いたような笑顔を見せる。

「だけど、俺の様子がおかしいことに気がついたのか、心配そうな顔つきで俺の顔を覗いてきた。」

「どうしたの？」

「いや……その……なんだ」

「言いにくいこと？」

「そうでもないんだが……」

「無理して言わなくていいよ？」

アルセの気遣いがうれしい。

「だから、俺はある決意をする。」

「ありがとう……アルセ。俺、決めたよ……。アルセが出したノルマの後二匹、俺は殺さない」

「それは……なんで？」

「俺……思っただよ、こいつら魔物にも家族がいるんだろうなっでさ。俺と魔物とかってさして、違いはないんだって。そう思ったら、こいつらと俺が重なった……家族を誰かに殺されてやり場のない怒りが、自分を包み込んでいくんだ……。俺は、誰にもそういう気持ちになつて欲しくない……。だから、俺は必要最低限……殺さない」

アルセはそれを黙って聞いていた。

そして、おもむろに口を開いた。

「甘いね、すごい甘いよ？」

「うん」

「私が殺してつて言っても殺さないんでしょう？」

「うん」

俺の気持ちが伝わるように、アルセの目を見て真剣に応える。

「この世界には常識が通じない輩がいっぱいいる。その人たちに襲われたらどうするの？」

「説得するよ」

少々、迷った後、

「ん、甘い……けど……いいんじゃない？私は好きだよ？そういう考えかた……」

認めてくれた！

それだけでもうれしい。

俺は喜びを伝えるべく、アルセを抱きしめる。

強く。

強く。

俺の気持ちが伝わるように。

「ありがとう、アルセっ！！」

真っ赤な顔を隠すように、俺の胸元に顔を押し付けてくるのは、こ
愛嬌というかなんというか……。

そして、俺は残りの二匹を殺さずに生かした。

グルズの骨や内臓を砕く真似はせず、ちまちまと攻撃を繰り返した。
そうすることで、相手の生活に支障を来たすこともなく、終わった
あとにはアルセに頼んで、痛み止めの薬草を置いておいて貰った。

俺は、ここでじいさんの言葉を改めて、強く刻み付ける。

”縛り”という鎖で深く、深く心に打ちつけた。

『困っている人がいたら、助ける』

人間だけでなく、なんでも、俺の手の届く範囲で助けると。

そして、俺達はいよいよ世界へとたびだとうとしていた。

決意（後書き）

ここまで、よんでくださった方々……

ホントにありがとうございます！！

感謝感激です^^

アクセス解析を見ていて、こんな小説をみてくださる方々がいても
らえるだけで幸せです

ありがとうございます

これからもよろしくお願いします

例のごとく、感想や誤字脱字など気軽に吐き捨ててください

待ってます！

旅立ち（前書き）

今回で森から抜け出します

司狼君の口調が安定しないorz

早く固定せねば……

旅立ち

グルズを無事に3体倒し、アルセは約束どおり、この森から出ようと言った。

もちろん、俺は断る理由はない。

二つ返事でオーケーした。

そのために、グルズを倒したんだし、早くこの世界を見て周りたかった。

そして、もはや定番になったフェンの亡骸の前。

ここが一番安全で、俺達の寝床になっているからしょうがない。

うん、しょうがない。

「え〜と、それじゃ持っていくものは……」

そう言つて、リュックにいろいろな物を詰め込んでいく。

食料や硬貨、薬草など旅に必要なものをつっ込んでいく。

おいおい、そんなに入るのか？

すでにリュックはパンパンだ。

だが、アルセはかまわず突っ込んでいく。

ド。エモンの秘密道具？

まあ、いいや。

突っ込まないでおこう。

「あ、そうだ！司狼！お父さんの爪を貰ってきて？」

「ハア！？」

「いや、だって司狼は武器を持ってないでしょう？私達、天狼族は……特にお父さん”天狼王”だった、お父さんの素材は、切れ味や耐久力も最高級のかかなり強い武器が作れるの」

「それで爪？」

「そうっ！」

そういつて、胸を張る。

タユンと胸が揺れるから、目に悪いです、アルセ……。

俺はそんなアルセから、微妙に目をそらしながら、

「売ってる武器とかじゃあ、ダメなのか？」

そうすれば、わざわざフェンを傷つけずに済む。

「そうでもないんだけど……いいのも、そう簡単に売ってないし……」

……

「というところ？」

「たま〜に、ホントにたま〜にだけど、魔族が呪いをかけてたり、誰かが死んだいわく付きの武器だったり。それに……」

「それに？」

「真面目な話、生半可な武器じゃ司狼の力に耐え切れないの。もう自分の力が常人からかけ離れてるのは分かるでしょう？」

こくんと頷いておく。

「だから、お父さんを使うの」

なるほど、ノコギリみたいなものか。

ノコギリも、コツを掴むとほとんど力を入れずに切る事が出来る。

だけど、なれない初心者にはわからないから、力の限りやろうとする。

そうすると、刃こぼれも早い。

つまりはこういうことだ。

過ぎた力は、壊すだけ。

いや、ちよつと待てよ？

「アルセの武器は？」

「私？そんなの持ってないよ？」

「え！？なんで？」

以外だった。

武器は大切だ。

見たいの事を言ってるから自分も何か使っているのかと思ったのだが……。

「私には魔力があるからっ！」

「魔力？」

よく漫画の主人公とかが、使う便利な力か？

さすが、異世界。

そんなのもあるとは。

「魔力って言うのは、ようするに世界と干渉できる量みたいなものだよ？ようするに……」

……ふむ、アルセの話の聞いている限り。

この世界でいう”魔法”とは世界から力を借りているという感じらしい。

魔力が高いほど、世界との仲は良くなり様々な力を貸してくれるということだ。

要するに、フェンから魔力なしと言われた俺は世界とは仲良くなれない。

逆に魔力がある、アルセは世界と仲良し。

簡略すると、そんな感じらしい。

「要するに、魔法を使うから、武器は必要ないと？」

「そうそう、私の魔力って高めだね？この世界でも十の指に入るくらいなの。だから、大丈夫っ！」

自分には下手な武器より、強力なものがあるってことか。

まあ、いまいち魔法とか実感がわかないが、本人が大丈夫と言ってるんだから大丈夫だろう。

「んじゃ、ちよつと貰ってくる」

「ん、もらってら」

……略語って異世界でも使うのな。

そして、準備を再開したアルセを背に、俺はフェンの近くに寄った。独特の獣臭の中に、乾いた血の匂いが鼻を刺激する。

あれから、一ヶ月近く経ったが気高い狼は、そのままの威厳を残して、立ち続けていた。

俺は一言、

「ごめん……」

と、断りを入れると、自分の腕よりも大きく、太い鋭利な爪をフェンの体から、引きちぎった。

剥がす際にブチブチブチツと筋肉と繊維が、千切れる音がしたが、もともと猟師まがいのことをしていたため、あまり気にしない。心が痛いことは変わらないが……。

続けて、二本目を掴み……千切る。

「貰っていくよ、フェン」

抜いてしまった2本の爪があつた場所――今は肉がむき出しになっている――を痛々しく思いながらも、御礼を言った。

2本の爪を両肩に背負うと、想う。

重い。

フェンの爪は重い。

重量的に重いのではなく、精神的に。

この爪で、いままで、どのくらいのものを壊したのだろうか。

今まで、どのくらいの種族を壊してきたのだろうか。

この爪で、どれほどのことをしてきたのだろうか。

そして、この爪でどれほどの命を守ってきたのだろうか。

爪は、所々が欠けていたり、変色したりしていた。

それは、この人が世界を種族を守ってきた証。

この人に負けない強い男になろう、そう思った。

まだ見ぬ武器、これから共に戦場を駆ける相棒に思いを馳せて。

アルセの所に戻ると、もう荷造りは終わっていた。

ちらつ、とリュックを見る。

あれ程パンパンだったリュックは、スラットシテイタ……。

よし、ツツコムよ？

いい加減にツツコムよ？

「そのリュックは何なの？」

「へ？これ？これは、”バッキュ”っていう旅のお供だよっ！」

リュックをこっちに見せびらかすように、見せてくれる。

「これはね、中が異次元に繋がってるの。だ・か・ら、この通り。まったくふつくらとしないでしょ？」

「なるほど、納得」

まあ、リュックは置いとく。

「とりあえず、2本持ってきたよ。これで大丈夫？」

「うん、十分だよ？……重いでしょ？」

最後は、聞こえづらかったがしつかり聞こえた。

「うん。重いよ……」

アルセもちゃんと、分かっているようだ。

それもそうか、父親だもんな。

「お父さんはね、自分の体一つで、これまで戦ってきたの。暴れる魔物を討伐したこともあるし、戦争に単身乗り込んで、終わらせたこともあった。そうやって、強引ながらもお父さんはいろいろなものを守ってきた。だからねー」

そこで俺は遮った。

言おうとしてることは分かる。

「俺にもそうあって欲しい……だろ？」

小さく頷く。

「大丈夫。最初は小さなことしか出来ないかもしれない。いや、それしか出来ないと思う。だけど、俺はあきらめないよ？俺の血に、魂に、フェンが宿ってるんだから、そんな恥ずかしい真似できるわけないよ。俺は絶対に、フェンと肩を並べる。約束するよ」

フェンから貰ったこの力。

無駄には絶対にしない。

「なら……大丈夫だねっ！頼むよっ！！司狼！！」

そういうと、手の平をこちらに向け、上に上げた。

……そういうことか。

俺はニヤツとする顔を、こらえながら同じ風にする。

「いくよー！！」

「ああ!!」

ハイタッチ。

パチーンと心地よい音と共に手を合わせる。

こうして、俺の短くも、内容の詰まった一ヶ月は終わった。
人助けの旅。

楽しみだ。

旅立ち（後書き）

まずは、ここまで読んでいただいてありがとうございます！

所々おかしいかもしれませんがね

申し訳ありません

誤字・脱字などがあればよろしくお願いします

次の更新は……未定ですね

人の階級（前書き）

初めての方、そうでない方もこんばんわ！

この話から、やっと冒険にでます

なにぶん初めてのことで、表現が幼稚だったりして情景が想像しにくいところもあるかもしれませんが、どうか最後まで読んでいただければ幸いです^^

では、お人よしのオオカミさん、新しい章をお楽しみ下さい

人の階級

（in 馬車）

白銀の森を出て、俺達は直ぐに通りかかった馬車を捕まえて、アルセが言う村に向かおうとしていた。

馬車……といっても、馬が引つ張っているのではない。

だから、実際は馬車とっていいのか、少し迷う。

俺達が乗っている荷台を引いている生き物は、“小龍”という、種族らしい。

トカゲのような姿で、発達した足が特徴の生き物だ。

飛ぶことをしなくなった彼らは、羽は小さく縮み、代わりに全体重を支え、早く行動するために発達した足は、人や荷物が入った荷台をも、簡単に引くことが出来る。

まあ、“龍族”と決定的に違うのは、争いを好まいということらしい。

さつきから、「らしい」を連発しているのは、俺が知っていたのではなくて、隣にいる少女、アルセが教えてくれているからだ。

目つきは厳しく、怒っているように見えるが内心は可愛いもので、

天真爛漫の女の子だ。

馬車に揺られて上下に揺れる胸や、さらさらと流れる様に揺れる銀髪は彼女の魅力を引き立てている。

しかし、ただの女の子ではなく、“天狼族”……自在に狼の姿になったり、人間の姿になることができ、許容している力や魔力も普通の種族よりも、一頭抜けた種族だ。

フェーン天狼族の王が俺に力を与えてくれた時から、いろいろとお世話になっている。

俺は見るもの見るものが珍しく、ほとんどのことをアルセに聞いている。

そんな細かいことにも、いやな顔をせずに教えてくれるアルセはやっぱり、優しい女の子だと思う。

「なんだい、そんなに外の景色がめずらしいのかい？」

と馬車を、操縦してくれている初老の男の方が言う。

「そうですね、こっちに來たのは初めてなので、見るものが珍しくてっ」

自分でも少しテンションが上がっているのが分かる。

「そうかい、それじゃあ、ゆっくり行こうかね」

そう言つて、馬車の速度を少し落としてくれる。

「すみません、ありがとうございます！」

緑豊かな草原に、鬱蒼^{うつそう}と生い茂る森。

誰も住まず荒れ果てた荒野に、人が居てがやがやと盛り上がる街。

そんな、初めて見る景色は、ゆっくり…… ゆっくりと過ぎていった。

「廃れた街”ポアー”」

目的地に着くと、乗せてくれたおじいさんに別れを告げて、ひとまずこの町の宿屋を探していた。

「おつとつ！？」

何かに躓いた。

木片だ。

しかし、転がっている木片はこれだけではない。

所々に、大きいものや小さいものまで、転がっている。

というのも、この町が…… 言つては悪いが、ボロイのだ。

この町に入るとき、町を表す看板も斜めにかかっており、強い風に吹かれれば直ぐに落ちてしまいそうだった。

家々は、所々煤けており、穴が開いていたり、屋根が無い家まである。

そして、全くといっていいほど人気が無い。

「アルセ、この村は？」

隣に歩くアルセに話しかける。

「ここはね、世界で一番階級が低い村なの」

「階級？」

「そう、人型種族の中では階級みたいなのがあってね？ここは、一番低い種族……人間が住む町だよ？」

「は！？」

人間が弱い？

「人間だった司狼には、少しつらい町だよね……」

そういつて、表情を曇らせた。

「人間はね？力も弱いし、魔力も使えない。時々異例で魔力を持って生まれて来る子もいるけど、大体は人間だからと迫害されるの。力が欲しいなら、力が強い種族を使えばいい。魔法が欲しいときは、魔法が強い種族を使えばいい。この世界では、そんな考え方が当たり前なの」

なんだよそりや……。使えないやつは引っ込んでろってことか？

そう思った途端に、血管が熱く滾る。

息が荒くなり。

血液もいつもより、流れが速くなり、全身に熱い血液が循環する。

「……」

「だから、何事にも劣っていると思われる人間は、結果的に最悪の階級になってしまふの……。司狼？」

俺の様子がおかしかったのだろうか。

話をやめて、呼びかけてきた。

「大丈夫？」

心配そうに顔を覗きこんでくる。

「ごめん、少し待って……」

胸に手を当て、落着こうと目を閉じる。

落ち着け、落ち着け。

そうすると、熱かった血液もだんだんと冷めてくる。

大丈夫だ、問題ない。

一瞬知らないお兄さんが瞼の裏に見えたが、気にしないことにした。
「大丈夫っ。心配ないよ」

そういつて、アルセに笑顔を見せる。

「本当に？」

「大丈夫だつて、さすがにショックだったけど、大丈夫」

二カつと笑つて見せると、アルセは柔らかい笑みを浮かべた。

急にそんな顔をされたのでドキツとして、話題転換をすることにした。

「それにしても、この村には何しに来たの？」

「あれ？まだ言つてなかったけ？」

「言つてないよ……」

またか……。

ハアとアルセに聞こえるほど、わざとらしくため息をつく。

「あれえ？アハハ……。馬車の中でしゃべったと思うのにな」

最後の方は下を向いて、ぼそぼそとしゃべっていた。

「おゝまゝえゝはゝ、また用件をつ！」

罰として、こめかみに拳を当てぐりぐりと捻じ込む。

「いたいっ、いたいっ、いたいっ」

いやいやと振りほどこうするが、俺の方が力は強いらしい。

がつちりホールドして、逃げられないようにする。

「ちゃんと、用件を言つてから、行動してな」

あまりやりすぎるのも、可哀想なので離してやる。

「あうゝ」

涙目でこめかみを押さえて、可愛く唸る。

「くすんっ。とりあえず、立ち話もなんだし宿に行こう？」

「それもそうだな」

これだけ騒いでいて、まだ人を見ていないというのも少し気になるが、とりあえずこの村に来た理由を聞くために俺達は宿屋に移動した。

隣を歩くアルセが

「あの力はいつたい？」

そうつぶやくアルセの声はよく聞こえなかった。

人の階級（後書き）

ここまで読んでくださった方ありがとうございます^^

この小説も、PVが2300

ユニークが550と、嬉しい結果になっています

パソコンの前で、本当にありがたいです

これからもがんばっていくのでよろしくおねがいします

話に戻すと、司狼君

実はまだ、秘密があります

この章でその秘密も明かされるでしょう！

例のごとく、誤字脱字があれば訂正します

遠慮せずに申し立ててください

よろしくおねがいします！

人の階級　くアルセく（前書き）

今回は初めて別のキャラからの視点で始めたいと思います

進むと思っていた方もうしわけありません

よろしくおねがいします

人の階級　くアルセく

く人の階級　アルセ視点く

今、私の傍らには男の子がいる。

名前は司狼。

異世界からお父さんが、呼び寄せてお父さんの力を受け継いだ人。前髪を隠すように、少し伸びた前髪。漆黒を思わせるような深く深遠の黒い髪。包み込まれるような漆黒の瞳。私よりも背が大きく、異世界で鍛えていたのであろう。やせ細っているように見えて、その下にある屈強な体はとても頼もしく思えた。

お父さんの力を受け継いだ司狼は、その力に溺れるでもなく、逆にその力を人助けに使ってくれるとも言ってくれた。

嬉しかった。

嬉しかったんだよ？

司狼。

お父さんの力は、強大。

一国を、半日で壊滅させられるほどに……。

それを、金目的や殺し目的で使わずに、「必要最低限……殺さない」と言ったのは、司狼が優しいからかな。信じてるよ。

司狼。

……でも、その後に抱きしめられたのはさすがに恥ずかしかったかな……。

私だって女の子なんだよ。

司狼はこの世界のものが珍しいらしく、いろいろなことを質問してきた。

「あの街は何？」

「あの生き物は？」

「今どこら辺？」

などなど。

この世界に興味が尽きないらしい。

私はそんな司狼の質問に、この世界を好きになるように、丁寧に質問して言った。

竜車を操っている初老を迎えた老人が、

「それじゃあ、ゆっくり行こうかね」

と聞くと、司狼は

「すみません、ありがとうございます！」

と元気な返事をした。

外の景色に夢中になっている司狼を、老人と一緒に温かい目で見守っていたのは司狼には秘密だ。

白銀の森を出て、竜車に揺られ、少しすると遠くから見てもさみしいと感じる町が見えてくる。

最低の階級を持つ人々が住む町”ポアー”。

いつ来てもこの町は好きになれない。

町には活気なんてものはなく、人々は食べ物にさえ飢え、壊れたものもろのものは捨てられずにそのままになっている。

町に入ると、司狼は足元に転がっている木材に躓き、転びそうになっていた。

それを、不思議に思ったのか辺りを見回し、私に質問をした。

「アルセ、この村は？」

まあ、当然の質問だろうね。

だから、私は胸が痛んだもののこの世界の階級について、話し始めた。ただ、

「だから、何事にも劣っていると思われる人間は、結果的に最悪の階級になってしまふの……」

と私が話していると、周囲の空気に圧力が増してくる。

全身にかかる圧力は、私の行動を制限する。

痛いくらいの空気。

全身を殴られているような感じ。

その圧力を放っているのはもちろん。

司狼。

歯をギリツと噛み締め、拳は限界まで握り締める。

漆黒の髪は、ピンと逆立っている。

今までで、初めて感じる感情。

――恐怖。

目の前の男の子が怖い。

今すぐにここから離れたいぐらいの殺気。

これが……人間？

いや、司狼はもう既に人間ではない。

では、天狼族の力？

それでも、たった数ヶ月でここまでの怒気を出せるのか？

わからない、そもそも”継承の儀”自体私はよく知らない。

このことについては後から考えよう。

今の問題は目の前の司狼。

「大丈夫？」

となるべく刺激しないように優しく声をかける。

一瞬、驚いたような顔をしたが、

「ごめん、少し待って……」

といい、胸に手を当て深呼吸をし始めた。

二、三回吸って吐いてを繰り返し、落ち着いたのだらう。

一瞬、顔を歪めたが、どこか苦しいというわけでもないだらう。

瞼を開けるといつもの司狼の顔があつた。

私を拘束していた圧力はすっかり消え去り、開放感を得た。
もう大丈夫だというので、

「本当に？」

と聞くと、

「大丈夫だつて、さすがにショックだったけど、大丈夫」
と笑ってくれた。

だから、私も笑って見せた。

顔を真つ赤にさせてそっぽを向いているけど、私おかしな顔をした？
おかしな司狼。

「それにしても、この村には何しに来たの？」

「あれ？まだ言つてなかったけ？」

おや？

「言つてないよ……」

わざとらしくため息をつく。

「あれえ？アハハ……。馬車の中でしゃべったと思うのにな」
と苦し紛れの言い訳。

本当は言っていない。

ごまかすように最後は小声で！

「おゝまゝえゝはゝ、また用件をつ！」

と俊敏な動きで私の体を拘束し、こめかみに拳を当てる。
司狼が密着してるゝ。

そう思ったが、襲ってくるのはこめかみに激しい痛み。
いたい！いたい！

なにこれ！？

「いたいっ、いたいっ、いたいっ」

なんとか、はがそうとするがそうも行かない。

司狼が人間なら楽勝なのだが、今はもう天狼族に近い。

男と女だ。

勝てない……。

少しシヨック。

だから、少し魔法を使おうとして……やめた。
大人気ないし、司狼とくつつけるのはいいし……。
痛いけど……。

「ちゃんと、用件を言ってから、行動してな」
そういうと離してくれた。

少し寂しいがそれよりもこめかみが痛い。

「あう」

なみだ目になっているのが自分でも分かる。

「くすんっ。とりあえず、立ち話もなんだし宿に行こう?」

「それもそうだな」

特に反対するわけでもなく賛成してくれた。

所々人の気配がしたが、司狼が殺気を放ち始めた時点でもの子を
散らすように逃げていった。

司狼は気づいてないんだろうな……。

とりあえず、宿に行くことにした。

それにしても、

「あの力はいつたい?」

少し調べて見よう。

そう思った。

人の階級 〜アルセ〜（後書き）

割と早めの更新ですか？

テスト期間中になにしてんだ（殴

まあ、本格的に入る前に更新しておきたかっただけです！

今回は別視点からの、物語に挑戦してみました

どうでしたか？

お楽しみいただけたでしょうか？

少しでも楽しいと思っていただけたのなら幸いです

そして、毎回見てくださっている方々

お気に入りになってくださっている方々

本当にありがとうございます

がんばって物語りを楽しくしていこうと思つのでよろしくおねがいします！

例のごとく、誤字脱字や感想などがあれば遠慮なく言ってください

次の更新は……未定ですw

助けを呼ぶ声（前書き）

誤字・脱字・修正箇所があれば指摘をお願いします

助けを呼ぶ声

「ポアー 広場」

階級について説明があつた後、なんとか落ち着いた俺はアルセと並んで宿屋に向かつていた。

それにしても人が居ない。

少しは歩いていると思うのだが、未だに人に会っていない。がらんとした静かな町は、少し煤けて見えた。

その焦燥感が少し嫌で、俺はいつもより口数が多かった。

「それにしてもアルセ？」

「え？何？」

「いや、アルセの服もどうにかしなくちゃなと思ってさ」
隣で歩くアルセに声をかける。

そうなのだ。

アルセは俺が、貸した上着を羽織っているだけ。

上着の胸部分は、形の良い胸に押され少し窮屈そうで、下着もなし。俺が少し長めの上着を持っていたから良かった物の、少し動けばいろいろ危なかった。

「えゝ、だって下着とか着けると窮屈なんだもん」

頬をぶうと膨らませて抗議する。

「いや、だって……恥ずかしくないの？」

「ぜんぜんっ！だって私、見られるのは平気だもん」

そういうことらしかった。

仕方ない……。

「それじゃあ、俺はアルセを見ない。恥ずかしいもん」

「え？」

「俺の国ではね、女性は恥じらいを持てって言うのが慣わしでね。はしたない子は、もう見ません。」

そういうと、俺はアルセからふいつ、と明後日の方向へ視線を向け

る。

「え？え！？いや、嘘だね？司狼っ！そんなことしないよね！？」

「……」

「こっちを見てっ！？」

服の裾を引っ張ってきてるけど、気にしない。

「あの……じゃ、じゃあパンツは着ける！どう！？」

「……」

「これもダメ？そ……それじゃ、ちゃんと、マント羽折る。羽織るから、ね！？」

お、あそこ。

家の屋根に止まってる鳥系の魔物達は夫婦かな？

一匹が気を引こうとしてるけど、もう一方は動く気配が無い。

「……服……服とかしたぎとかちゃんと着るから……こっち見てよ……しろっ……」

あ、相手にされなくてしょんぼりしてる。がんばれ。

「なんで……こっちみてくれないのよ……いじわるっ……うっ……」

……グスッ……」

「ちょ！？」

閑話休題。

明後日なんか見てる場合じゃない！

俺はすぐにアルセを宥めにかかった。

あれから、アルセはご機嫌ななめだ。

頬を膨らませて、俺の少し先を歩いている。

「人と話ができる少し期待したんだけど……全然人が居ないし……」

「それは……司狼がさっき怒気を振り撒いたせいだけだね……」

「え？」

ボーとしていたので、上手く聞き取れなかった。

「なんて言ったの？」

「知らないっ！」

「まあ、いいけど……」

ピューー

そう話していると、小さく風が吹いた。
これは……

「アルセ……」

「うん、わかってる。行くんでしょ？」
流石っ！

さっきまで怒っていた顔はどこへやら。
真剣な眼差しで行けと訴えている。

――風に運ばれて来たのは声。

「……やめっ……な……よっ！」

「いい……から……いっ！」

どこか、争うような声。

片方はもがいているような必死な声だ。
耳を澄ます。

「やめな……さ……っ……！」

もつとだ……。

集中しろ。

その声だけに集中する。

「やめなさ……離し……」

もつとだ、もつと！

「やめなさいっ！離し……いっ！」
もつと！

「……誰かつ！助けてっ！」

俺は知らずの内に走り始めていた。

助けを求めているなら、助けよう。
それが、俺が生きている理由だから……。

助けを呼ぶ声（後書き）

ユニーク数が1000を突破！

毎度みてくださる方々本当にありがとうございます！

そのおかげで心が折れずに、毎回更新できてます！

――

前にもいいましたね（笑）

テスト期間になにやってんだっ（殴

しょうがないじゃないですか？

テストやってる間も考えちゃって、テストの問題用紙にびっしり！

そりゃもう、更新するしかないですよね^^

今回は、アルセとの少しの絡みと次につなげる話でした

なかなか進みませんね（汗

すみません

テストが終わったら、また更新するつもりです

では、感想などお待ちしております

あ、最近仮面ライダー面白いですよねっ！

では、誤字脱字などストーリーリー構成などよかったやつまらなかったの感想をお待ちしております^^

初めての人助け

〃〃〃 広場〃

司狼達から少し離れた場所。

村の中心に位置し、そこは少し開けた場所になっている。

そこで、一人の女性とその身長を遥かに超える身長の大男がいた。

大男は女性が逃げられないように、腕を掴んで空中にぶら下げている。

「誰かつ！助けてっ！！」

「ハハハっ！誰も助けてくれるわけ無いだろ？こんな屑の溜まり場でっ」

「この町の悪口言っなっ」

「だまれっ！」

パチンツ

大男は捕まえている女性を叩く。

叩かれた頬は徐々に赤みを増していく。

皆が広場と呼び、普段であるならば、談話したり通行人で賑わっているのだが、今は死刑執行時の様な重苦しい雰囲気広場を包んでいた。

広場には、女性と大男一人しかない。

周りの家屋には人がいるのだが、恐れをなして止めに出行くことは出来ないでいた。

そして女性はキツと大男を睨み付ける。

「黙るものかつ！この町も人も誰も馬鹿にさせないっ！キサマの様なクズに馬鹿にされてたまるもんですか！」

「んだと！？テメエ……それ以上言って見る。ただじゃすまさねえ

ぞ……」

大男は醜悪に満ちた顔で、頬を三日月型に吊り上げる。

そして視線を彼女の体のいたる所に向ける。

そして頭から足まで見終わると、

「そうだなあ……お前高く売れそうだなあ……性格は調教するとして……その色気満点の脚。ソソルぜえ……」

「っ！？」

女性に何とも言えない悪寒が走る。

生理的に受け付けられないものが目の前にいる。

――気持ち悪い――

だがそう思っても言えない。

先ほどから気の強そうな発言をしているものの、足は生まれたての子鹿のようにガクガクと震えている。

震えが伝わらないように虚勢を張る。

大男は怯えていようと、馬鹿にされていようと余裕を崩さない。

なぜなら種族からして桁が違うのだ。

大男の種族は獣族。

しかもその中でもっとも強いとされるミノタウルスだ。

ミノタウルスだという証の擦れた角に。

丸太の様に太い足と腕は岩を容易に砕き、鍛え抜かれた胸筋は刃物さえも跳ね返す。

そんな化け物に、一般男性に勝てるかも分からない女性が勝てるわけが無い。

「離してっ、離しなさい！！」

足を必死に揺らして抵抗する。

だがしっかりと掴まれており、抜け出すことが出来ない。

「ほらほら、あ、逃げだそうなんて考えるなよ？俺が本気になればこんな村直ぐに潰せるんだからなあ……」

やや興奮気味に言う。

実際この言葉は冗談ではない。

魔力や力を持たない人間が獣人などに立ち向かえるはずも無く多種族の盗賊などに狙われ全滅した村も少なくはない。

女性もその事が分かっているのだろう。

抵抗を止めブランと空中に垂れる。

だが視線は、ミノタウロスを殺さんとはかりに鋭い目を向ける。

「そうだなあ……売り払う前に、味見でもしておくかあ」

そういうと女性のワンピースを脱がしにかかる。

「っ！！！！？？？？」

凄まじいほどの嫌悪感。

好きでもない男に裸を見られるという屈辱。

何もできない無力感。

女性は現実から目をそらすようにギュッと目を閉じた。

だが、彼女の服が脱がされることは無かった。
なぜなら、

「そいやっさ！」

「ぬお！？」

誰かも分からない、この場にそぐわない陽気な声が聞こえたと思っ
たら、ミノタウロスの短い悲鳴。

その瞬間、突然に浮遊感に襲われる。

「きやつ！？」

彼女の体は地面に落ちることは無い。

彼女が目を開けるとそこには、自分をお姫様抱っこする黒髪の少年
と、吹っ飛ばされたのか少し先でお尻を突き出して寝転んでいるミ
ノタウロスだった。

あの時間こえた声は、気のせいではなかった。

アルセに先に行くと言え少し走ると、腕を掴まれて宙ぶらりんになっている女性と、服を脱がしに掛かっている角を生やした大男がいた。

迷う必要なんかない！

突撃いいいいいい！！

俺は更に速度を上げ、

「そいやっさ！」

「ぬお！？」

大男に足から突っ込む。

いわゆるドロップキック。

ドロップキックは上手く腰にめり込み大男の体が、くの字に曲がる。そして、勢いよく吹っ飛んで行った。

吹っ飛んだ大男は土ぼこりを上げ、ズサーーと地面とキスをしたが今は見ている場合ではない。

大男の腕を離れ宙に投げ出された彼女を包み込むように抱き上げる。

「大丈夫？」

まずは怪我が無いか確かめなくちゃね。

だけど、彼女はふるふると頭を振るだけ。

なんとか喋ろうとしてもパクパクと声にならない声を出す。触れている手からわずかな震えが伝わってくる。

俺が今出来ることは……

「もう大丈夫だよ？だから安心して、ね？」

ただ安心できるような言葉を喋ることだけ。

「司狼っ！」

「おっ……アルセ良いタイミングだ。この人を頼む」

そう言っただけでアルセに彼女を引き渡す。

「わかった！まかせてっ」

グッと親指を突き出してきた。

だから俺も、

「任せたっ」

親指を突き出して応えてやった。

「ググっ……！一体何が……」

大男は蹴った場所を押さえながら、よろよろと立ち上がった。

「起きた？」

「キサマか！？俺様を突き飛ばしたのは！？」

「うん、そうだよ？」

「キサマは、誰を突き飛ばしたと思ってるんだあああああ！！」

大男は怒りに顔を真っ赤にさせる。

唾がここまで飛んでくる。

ちよっ！？

汚い！、汚い！

「気をつけて、司狼。あれはミノタウロス。力が自慢の種族よ」

「オーケー。わかった」

「暢気に話をしている場合かあああ！？」

ミノタウロスはその豪腕を、俺めがけて叩きつけてくる。

当然のこと俺はよける。

だがその豪腕をミノタウロスは止めることなく、地面を叩きつける。
メキッという音と共に地面に穴が開く。

ミノタウロスが拳をどけるとそこには拳大の小さなクレーターが出来ていた。

「やるね」

「フンっ当たり前だ。俺様はミノタウロスの中でも最も力が強かった男だからな。今なら泣いて土下座したら許してやらんことも無いぞ？」

「冗談っ」

せせら笑うように、ミノタウロスを見る。
ふむ。

力に自信があるようだな。
どうするか……。

いくら、力の強い種族だとしてもおそらく俺が本気で殴ればただの肉片に成り下がるだろう。

だが、俺はそんなことはしたくない。

命を無駄に刈り取ったりはしない。

なら、俺がとる道は考える中で一つかな。

「ねえ、おじさん？」

「なんだ！」

「泣いて謝るなら今のうちだよ？」

「ふざけるなっ！」

ミノタウロスは姿勢を低くし、こちらに突進をしようとする。
だがその前に……

「止まれっ！！！」

俺は大声を発した。

これが指す意図は、

「っ！？」

やつの一瞬の停止と、こちらに視線を向けさせること。

そして俺は、足を上げ地面に向けて踵を落とす！

ドゴオオオオオン！！

瞬間、地面が爆ぜる。

やつの様に地面にめり込むのではなく、地面の方が爆ぜる。

そして、そこにはやつと比較にならないクレーターと、顔面を真つ青にするミノタウロスの姿があった。

「なっ……はっ……なっ……」

上手く言葉が紡げない様だ。

「大丈夫？」

手を貸そうと近づいていく。

「クツ……来るなあぁ!？」

目にも留まらぬ速さで、立ち上がり巨漢に似合わない速度で逃げていく。

「おや、少しやりすぎた？」

「やりすぎっ」

「イタッ」

いつの間にか後ろにいたアルセが、ジャンプして俺の頭を叩いた。

「どうすんの!？町に穴が開いてるじゃない!!」

「いや、結構手加減したんだけどなあ……」

「あれで!？」

俺が作ったクレーターを指差しながら驚くアルセ。

「あのお？」

さらに文句を言おうとしたのだろう。

アルセは行き場を無くした指をあっちこっちしながら、声を発した主を見る。

「もう大丈夫？」

これは俺だ。

「ああ、その……感謝するよ」

彼女はぺこつと頭を下げた。

初めての人の助け（後書き）

ふい

長いですねえ……

飽きてしまった方申し訳ありません

初の戦闘？の場面でした

戦闘と言っていていいんですかねえ（笑）

まあ、そんなこんなで司狼君ムキムキです

屈強な人にも負けません

テストも無事に終わり、今度から自由に投稿できるでしょう

では誤字脱字や感想などがあればよろしく願いします^^

疑惑（前書き）

こんばんわっ

お久しぶりです^^

少し短めです

いろいろはあとがきで書いじつと思つので前書きは空白に書いじつと思
います

それではお楽しみ下さいっ！

疑惑

「それでは、改めまして。私はサビィ・ハーデと言う。助けてくれてありがとう、助かった」

そう言つて目の前の女性、ハーデさんは関白ながらも深々と頭を下げた。

その際に彼女の栗色の髪は、クセ毛なのか先の方は丸まっており、ゆらゆらとまるで海草のように揺らめいていた。

「いえいえ、気にしないでいいですよ？」

本当に申し訳ない顔をしてこちらを見つめてくるのでこっちが何かしたのかと自問自答してしまう。

「それに宿屋まで連れてきてくださったわけですし」

背もたれの無い煤呆けた木製の椅子。

丸型の机に椅子が四つ囲むように置かれている。

そして現在地はこの町、プアーに唯一ある宿屋。

ハーデさんに着いてきてと言われて、着いて行くと他の建物よりは生活感がある家に着いた。

傾いたドアを開けると食堂に通された。

「そうか……それは助かる。何かくれ何て言われても困るところだ。なんて言つてもここには何も無いからなあ」

そういつて自嘲するように呟いた。

俺もどつという顔をすればいいのか。

顔が引きつって苦笑いになってしまった。

「そんな事より少年……キミは一体何者だ？」

先ほどまでとは一変、こちらを射んとばかりに視線を強める。

先ほどまで友好的だったのにその態度はどこへやら。

どうしようか……。

正直バラしてもいいのか迷う。

するとアルセがハーデさんからは机の影で見えない俺の太股に指を

添えた。

何々？

……し・や・べ・つ・た・ら・お・ろ・す。
ふむふむ。

訳すと？

……喋ったら卸す。

何を！？

何処を！？

焦った俺はアルセの太股に手を添える。

「ひゃんっ」

するとアルセはビクンっと体を跳ねた。

パチンと手を払われてしょうがなく手を収めた。

「何をしている？」

おっとそつえば。

アルセに視線を送る。

アルセはこくんとうなづくと絹のように美しい白銀の髪を揺らして、俺の代わりに喋り始めた。

「この人の名前は春原 司狼といます」

「待て、今なんて言った？名前か？」

「え？」

「ああ、すみません。こちらの大陸ではあまり使われない名前です
たね」

「うむ」

ハーデさんは腕を組み素直に頷いて見せた。

「どういうこと？」

「司狼の名前はここよりもずっとずっと遠くの大陸で使われている名前
なの。ここでは通じないの忘れてたっ」

「え？でも、アルセは普通にわかってない？」

「それは私がお父さんに着いているいろいろな大陸を回っていたから。
ちなみに言つと司狼の名前が通じるのはジパングっていう国だよ？」

「へえ」

「それで……すみません、話が脱線しましたね。彼の名前はシロウ・スノハラです」

「ふむ、では最初の質問に戻ろう……キミは、何者だ？」

「……」

とりあえず俺は黙っておこう。

この世界のことはまだよく分らない。

そういうのも含めてアルセに任せたほうがいいだろう。

「私でさえ抗うことのできなかったミノタウルスを上回る腕力。やつが恐れをなして逃げていく様などそう見れはしない。それに、キミは町中で村のみんながその場から動けなくなるほどの殺気を見せたようだな。みんなはキミを恐れているぞ？」

そんなことに！？

今まで人に会わなかったのはそういうことなのか！？

アルセのバツと見ると、肩を震わせて顔を背けていた。

「ぷぷつ、ふつ……」

「笑うな！？」

「いい加減にしろっ！！」

鼓膜が裂けるのではないかという声量。

頭の中にキーンという音が響いて頭がトンカチで叩かれたようにがんと痛む。

「こちらは真面目に話しているんだっ！キミ達が一体何者なのか！？それがはつきりしない限りは、私も……町も安心していられなんだ！！」

「それは……」

「喋ることが出来ないのなら出て行ってくれ！この町のために！」興奮したようにハーデさんは整った顔を怒りに歪めて、こちらを怒鳴る。

少々緊張感が足りなかったか？
それもそうだな。

新鮮な景色とかいろいろなことを見たり聞いたりしている浮かれていたようだ。

周りがまったく見えていなかった。

反省しなければならぬ。

だから喋ろうとした。

だけど口が重い。

それもそうだ、町を守ろうと必死になっている者と一人ではしゃいでいた者では語る言葉の重みが違う。

俺が今喋っても、それは曲げると直ぐに折れるような木の枝のように中身がすかすかだ。

俺は下を向くしかない。

……クソッ。

ハーデさんに怒っているのではない。

自分にだ。

「まあまあ、まずは落ち着こうじゃありませんか？」

と、物腰の柔らかそうな声と共に、目の前にことごとく優しくティーカップが置かれた。

鼻をつく甘い匂いと、ゆらゆらと湯気から伝わってくるちょうどいい温かさが心にしみる。

「こんな時にそんなことを言っている場合か!？」

俺はこれを置いてくれた方を見る。

そこにはここで着るには、浮いてしまうのではないか？

燕尾服に身を包んだ、白髪の老人がいた。

疑惑（後書き）

ハイっ！

お久しぶりですw

長い間放置して申し訳ありません

一週間に一回は更新できるようにしていきたいです

毎回見ていただいている方々っ！ありがとうございます！！

お気に入りをしていただいている方々も17と登録していただいております

本当にありがとうございます^^

p vもあと少しで1万へ行きそうです

ちょうどいい区切りで番外編みたいなものもかいて行けたらな？と思っています

欲張りですみません（汗

それでは、感想など受け付けております

また誤字脱字などがあれば申し付けてください

すぐに直します

それではノシ

お互いに隠し事（前書き）

早い段階で更新します

一万アクセスを無事に超えました

お気に入りしてくださっている方々、
応援してくださる方々に深く感謝の言葉を……

お互いに隠し事

「そんなことを言っている場合か!？」

ハーデさんがその白髪の老人に叫んだ。

老人は穏やかな顔を浮かべ、髪をオールバックにして上げている。こちらを優しそうに見守る空のように青い瞳は包み込まれるような不思議な感覚に襲われる。

そしてこの町で初めてみた服と認められるような燕尾服。

この町の人々は大体ボロ布をワンピースのような形で着ているのだがこの老人は黒を身に纏い正直に言うところの町から少し浮いていた。なんだろう、この人。

どこか、フェンと似ている気がする。

「怒ってばかりいては見えるものも見えなくなってしまう……まずは落ち着いてみたらどうですか？」

「しかしっ」

「では、サビイ様？この町の……いえ貴方の人生を助け出してくれた恩人を何時までも疑い続けるのですか？」

「それは……っ」

「それによく考えてみてください……。こんな成人もしていないような少年がこの町を蹂躪するような悪党に見えますか？」

「だが私は、この村を守るものとしてっ」

「その前に貴方は一人の人ですよ？サビイ様」

「くっ」

老人がそう言うのとハーデさんは何も言うことが出来なくなり、重たい沈黙が俺達を包んだ。

ハーデさんが反論するのだが老人はただ否定するのではなくて相手を尊重する様な言い方で話し合いをしている。

俺だったら完全に一方通行な言い合いになっていただろう。

ハーデさんも少しバツの悪そうな顔をして、椅子に座りなおした。

「分かったよ、グラシオ。シロウ達もすまなかった……」
先ほどまでとは違って落ち着いた声。

だが、その声質の中にもまだ疑いの音が聞こえる。
全信賴をしているのではないのだろう。

俺も老人が用意してくれた飲み物を飲んでみる。

「アツッ」

あ、熱い？

そんな馬鹿な。

こんな熱さ普通に飲めていたぞ？

…… まで考える。

今の俺は天狼族の力を受け継いでいる。

フエンが確かこんなことを言っていたような……。

『人よりも天狼族に近い体になる』

ふむ、つまりこういうことか。

”猫舌になった”

…… しょうもなっ！？

え！？

オオカミって猫舌なの！？

まさか、こんなことにまで影響が出るとは……。

少し遠い目をしていると、

「熱かったのですか？」

老人がこちらを心配そうな青い瞳で見つめてくる。

「いえ、大丈夫れす。猫舌らのを忘れてまひた」

「だ、大丈夫？」

アルセも心配してこちらを見つめてくる。

「舌だしてみて？」

「べー……」

「あや、真っ赤になっちゃってるねえ……」

「まひか……」

これから真面目な話し合いが始まるところだったのにタイミングの

悪い……。

一人かつぜつが悪い何てかつこ悪いし、みつともない。
そんな未来に少し絶望していると、

「シロウ様。カップをこちらに渡して頂けますか？」

老人がそういうので、カップを差し出した手に渡した。

「これは失礼しました……。私としたことがお客さんにお怪我をさせてしまうとは……。」

「待てグラシオ……。」

「しかし……。」

「無駄なことに使うな」

先ほどとは立場が逆転。

今度はハーデさんが強い口調で、老人を止めている。

老人が何かをしようとしているのをハーデさんが止めているようだ。

「……かしこまりました」

老人は小さくため息をつくと、こちらに向き直り、

「それでは氷を入れて来ますので少々お待ち下さい」

「い、いえいえこちらこそすみません……。」

「御気になさらないで下さい。こちらの不手際です」

そういうと老人は優雅に奥へと姿を消した。

「すみません、あの方は？」

そういえば名前をまだ聞いていなかった。

何時までも老人、老人では失礼だ。

「ふつ、自分の正体は明かさなくせにこちらのことを聞くか……」

俺は息を呑んだ。

今それを言われると何も言えなくなる。

ハーデさんは嘲る様に笑う。

まあ、こんな風に言われるのは俺のせいだが流石に最初の態度と比べると完全に俺達は敵として認識されているのだろっ。

「まあいい……そうだな、名前はグラシオ・メンテというらしい。

グランテはこの町の近くを飢えて倒れていたのを助けた。どうやら、

かなり遠くの国からやってきたようだな。何処から来たのかはわからん。だがやつについてどうこう言うつもりは無い」

俺達と対応がちがう。

「それは……どうしてですか？」

「教えるわけがないだろう？」

ハーデさんはこちらを冷たい視線で射抜く。

「……どうぞ」

何時の間にか戻ってきたメンテさんが持ってきた飲み物はキンキンに冷えていて飲むとはしなかった。

お互いに隠し事（後書き）

ただいま13000アクセスを突破！

2200ユニークを突破！

お気に入り30を突破しましたw

こんな小説を評価してくださっている方々本当にありがとうございます！！

嬉しかったので今回は早めの更新とさせていただきます

この小説を書き始めて早2ヶ月……早いものですね

それではまだまだお人よしのオオカミさんは続きますので応援のほどよろしく願います^^

例のごとく感想や誤字脱字などがあれば遠慮なく申し立ててください

オオカミは猫舌というネタでしたが、そのことは仮面ライダー555の主人公を参考にしていますw

それではっ

次の更新は……未定ですね（苦笑

番外編 お人よしのご老人（前書き）

えーと、アクセスが一万超えたってことで番外編をかくぞと言って
ましたがやっとな投稿できます

すこーし長いですがよろしくおねがいします^^

番外編 お人よしのご老人

〔日本〕

司狼の両親が亡くなってから7年が経っていた。

引き取ってくれたおばさんの方は数ヶ月前に亡くなり今は司狼とおじいさんだけで生活していた。

仄かに香ってくる湿気った土の匂い。

土が空から降ってくる雫を受け、独特な匂いを届かせる。

土を踏めば土がぴちゃぴちゃと足に引っ付いてくるようでそれがどこか可笑しくて、クセになってしまいそうな感触だ。

耳を澄ませばサーと雨が優しくに降っており、屋根やバケツに当たるとポンツ、パンツ小さな音楽会をしているようだった。体に当たりシャツを濡らし頬を雫が伝い落ちる。

そんな静寂を打ち砕くように騒々しい声が割って入った。

「おい、司狼！ちよっと手伝えっ」

ガツハツハと豪快に笑う男。

彼の名は春原豪気。
はるはらのうき

お年寄りとは思えないほどしっかりと背筋を伸ばし、どすんどすと地面を踏み鳴らす。

髪は完全に白髪になっており、まだ中年といわれれば通るのではないかと思われる幼げな少年の面影をにこにこと貼り付け司狼に近づいていった。

その司狼と同じ漆黒の瞳の奥には一際淡く輝く優しい光が灯っていた。

司狼の両親亡き後、親戚中が渋っている中、率先して司狼を引き取ると言った老人である。

そんな何故か張り切っている豪気に司狼は、嫌だともいうような不機嫌な顔を隠しめせず、ぶーと文句を垂れた。

「なんで俺がそんな事？」

豪気はそんな司狼の態度も気にせず、ガツハツハと笑うと、

「いいじゃねえか。いつものボラ……なんちゃらだっ！」

「ボランティアね……。なんでいつも忘れるのかな？」

やれやれと顔に手を当てかぶりを振る。

「なんでもいいわい、ホレ着いて来いっ」

「行かないって行っても無理やり連れて行くんでしょ？……ちょ、やめて、行くからっ！服が伸びる」

文句を言う司狼を無理やり引っ張って、歩き始めた。

「傘は？」

「いらん、どうせ。向こうへ行けば汗だらけじゃ。そんな変わらん」
「んじゃ、タオルとかぐらい持っていこうよ？ああもっつ！人の話を聞かないんだから」

大体いっつも着き合わせられる俺の身になってよと心の中で思う。

どうせ言ったってつれて行かれることに変わりはないのだ。

小さくため息をつくと黙って引っ張られる。

雨足が強くなり、司狼たちを進まさんと二人を強く強く打ちつけた。

「ああ、腕が痛い……」

司狼は肩を回したり、腕の筋肉を揉むなどして何とか痛みを和らげようとしていた。

豪気が言うボランティアは本当にたいしたものではない。

例えば田植えをするから手伝ってくれないか、子どもの世話をしたい欲しい、害獣が出た駆除して欲しいなど時々町会から頼まれる事だってある。

そんな時、豪気は決まってこういうのだ。

『任せとけ！！』

相談されたら即承諾。

持ち前の豪快さと気前のよさで村一番頼られていて、一番の人気者だ。

そんな豪気は今まさに手伝い——今回はただの模様替えだった——を終

え頼まれていた人と世間話をしている。

会話は聞こえて来ないが話は弾んでいるようだ。

時々ガツハツハと豪快な笑い声が村中に響く。

雨で目が開けられないほど降っているというのによく通る声だ。

司狼はそんな豪氣を理解できないとでも言つような眼差しで見つめた。

何故こんなにづらい思いをしてまでボランティアをしているのだろうか。

何故、何の見返りもなしで助けることが出来るのだろうか。

何故……あの人はあんなに気持ちよく笑うことが出来るのだろうか……。

（わからない……俺には……。）

司狼は突然、本当に唐突に家族を失った。

さよならも言えない。

ありがとうも言えない。

愛しているも言えない。

人間として持ち直しているが今の司狼には感情というものが多々不足していた。

だから、あそこまで自分の感情を表に出せる人がわからない。

どうして笑えるのかが分からない。

すると肩をバンバンと叩かれた。

司狼が顔を上げるとそこには巨木。

いや豪氣がいた。

「どうした、何か考え事をしていたようじゃないか」

「いや、何もないよじいさん…… あったとしてもあんたには関係ないことだよ」

その一瞬、豪氣がそのにこにことした顔が曇ったが下を向いていた司狼はそのことに気がつかない。

「そうか、ならいいんじゃないのう」

「うん、ありがとう……」

雨が激しく司狼たちを打ち付ける。

目を開けようとしても常に目を叩かれているように痛みが襲い開けることができない。

そんな中司狼たちは自身の上着を傘がわりにしてとぼとぼと歩いていた。

司狼は何故感情を表に出せないのかを、豪気は先ほどから浮かない顔をしている孫を心配して……。

二人の気持ちは互いに一方通行ですれ違いもしなかった。

「司狼——」

「豪さん！！大変じゃっ」

「な、なんじゃ？」

出鼻を挫かれた豪気は戸惑いながらも声をかけてきた老人に問いかけた。

「実はのお……。以前からここいらで畑を荒らすとか悪さしていた鹿が、今度は暴れ始めてのう！？もう、えらい騒ぎじゃ、どうにかできんかの？」

老人は息も絶え絶えに一気に捲くし立てた。

よっぽど急いでいたのだろう。

だが、その言葉を聴いて先に行動したのは豪気では無かった。

司狼だ。

濡れるのはお構いなしに走る。

走る。

走る。

ただがむしゃらに走る。

司狼がただ一つ思うこと……。

——じいさんが何故、あんなに笑うことが出来るのか……。

この出来事を自分が解決すれば少しは分かるのだろうかと考えて。

司狼の背中に呼び止める声が、掛けられたが激しく打ち付ける雨で司狼まで届くことはなかった。

司狼が問題の場所まで行くと合羽に身を包んだ大人たちがああだこおだ言いあっていた。

話されているのはもちろん件の鹿のこと。

「あの……今はどうなってるんですか？」

「危ないから下がって……ああ、豪気さんの所のボツチャンか」

「ええ、そうです」

「そうか、ところで豪気さんは？」

「遅れて来るそうです、流石に若さには勝てないんでしょうね」

司狼は愛想笑いを浮かべた。

だが大人はそれを信じたようにうむと頷くと現状を話し始めた。

「ええと、そうだね。君から豪気さんに伝えてくれるかな？」

司狼はコクンと頷いた。

「それじゃえ」と今はねえ、あそこが見えるかい？」

そういつて大人は目と鼻の先にある雑木林を指差した。

それにつられるように司狼も視線の後を追う。

見るとそこにはベキベキツベキツと木の皮をいとも簡単に剥いている想像以上の生き物がいた。

踏み込むたびに土が跳ね飛ぶほど屈強な脚。

丸太のように太い体。

幾重にも別れそれだけでも危険だと分かるような角。

見るからに普通に見る鹿とはどこかちがった。

「おそらく、こちら辺の主だろうなあ……それが何か知らんが下まで下りて来ちまったんだなあ……」

「へえ……」

司狼にはそれがどれほど危険なものか分からなかった。

田舎に住んでいるといっても司狼は狩りといった野生の動物に近づく機会はありませんかったのだ。

司狼は他の大人たちとはちがいが何故こんなものに怖がっているのだろうと不思議だった。

人は普通体験してみないとその物事の本当の恐怖を覚えることはで

きない。

例えば激しい地震を受けていない人は、自分なら大丈夫。

自分なら助かることができると、妙な自信をもってしまう。

逆に震災などの被害を直に受けた方々はもうこんな思いはしたくない。

といった恐怖を覚えてしまう。

今の司狼はそういう状況である。

周りの大人たちは自然の動物がどれほど怖いのかを知っている。

だが司狼は知らない。

だからたいしたことはないんじゃないか。

自分なら出来ると思ってしまう。

そう思うと後は簡単だった。

司狼は鹿に向かって足を動かす。

群れる大人たちの雑踏を潜り抜け、一直線に向かう。

「バカッ、あぶねえぞ!？」

大人たちの制止を振り切って司狼は駆け抜ける。

「大丈夫ですって、俺がなんとかしますっ」

「無理だっボウズ!? 戻れ!！」

鹿もこちらの騒動に気がついたのか警戒するように耳をピンと立て、つばらとは言えない自信に満ちた瞳で司狼を真っ直ぐに見据える。

そして司狼は鹿の真正面に立った。

そう真正面に……。

「バカっ! 真正面に立つな!！」

「え?」

野生の動物には真正面に立つてはいけない。

敵として見られてしまうからだ。

当然司狼は真正面。

すると……

「ブルルルルアアッ!！」

興奮したように鹿は、司狼に向けて大地を激しく蹴り突進してきた。
「しまっ!？」

ふとましく立派な角が司狼の目前にまで迫る。

「……ッ!？」

司狼は硬く硬く目を閉じた。

それは司狼の体に突き刺さり、鮮血が辺りに飛び散り、雨によって流れていった……。

かに見えた。

「……?」

だが実際に司狼に痛みは無い。

体のどこにも痛みはない。

変わりに目の前には壁。

いや、これは……。

(この壁、いや背中は……!?)

「じ、じい……さ、ん？」

司狼からは見えないが豪気はニヤリと笑ったような気がした。

「いよう、随分ムチャしてるようじゃねえか」

豪気はギリギリと鹿の角を掴み、鏢迫り合いをしている。

足場が悪いのか豪気はズルズルと押され始めている。

「ふむ、少し……キツイのお……」

「だ、大丈夫なのか!？」

「……ッ……」

「返事をしろよ!？」

「うるさいのお……」

「グッ……」

豪気から漂ってきた凄まじい気迫に司狼は思わずたじろいだ。

鹿の方も巨体をビクツと震わせた。

瞳はゆらゆらと水気を帯び、瞳の奥に怯えが伺えた。

「おどれ、退かんか……」

掴む腕に力を込める。

足を踏ん張り地面に根を張る。

「……」

「退け」

「ブルウ……」

「わしが怖いなら……さつさと退かんかあああああつ!!」

「ブル!?!」

豪気の叫びにビクツと体を振るわせると小鹿のような俊敏な動きでどこかへ行ってしまった。

「んな……」

人間離れな、とつつこみを入れたかったが腰が抜けて上手く繋がれなかった。

ザツザツザツと豪気が司狼に近づいてくる。

そして座り込んでいる司狼に視線を合わせると、

「このバカモノがつ!!」

「!?!」

メリイツと音を立てて豪気の拳が司狼の頬に突き刺さる。

「ゲホツ、痛ツて!?!」

司狼の口から赤い雫が滴り落ちる。

だがそんなことはお構いなしに、強い力で司狼の胸倉を掴む。

司狼と豪気の視線が交差する。

お互いがお互いの目を見る。

（じいさんの目に浮かんでいる色。これは……怯え?）

「じいさん……流石に鹿は怖かったのか?」

豪気は驚いたように目を見開き。

「バカめ……」

そついうと豪気はふわりと司狼を抱き寄せた。

「ああ怖かった……怖かったさ……お前を失うことがなにより……つらい……」

豪気の声はわずかに震えていた。

「何が起こるのかわからなかったんじゃ。また……また家族を失うのかと……」

（そうか……じいさんに見れば、孫も娘も義理の息子も居なくなつてたんだな……悲しいのは同じか……）

「なあじいさん……なんであんたは人助けをするんだ？」

豪気は少し考えるようにして。

「そうじゃのう……特に理由なんてないわい」

「ははっ、そうか。だけどじいさん……」

「なんじゃ？」

「あんたは暖かいな……」

「そうか……？」

「ああ、暖かい。日向にいるみたいだ……」

「司狼……一つだけ言っておくぞ？」

「ん？」

「無理だけは……するんじゃない……」

「うん……」

「後な人助けをしたいなら優しい人間になれ」

「……二つじゃねえか……」

「豪気さんっボウズ、大丈夫か！？」

ことが終わったのを見計らつてか遠くで見つめていた村人たちも集まつてきた。

「大丈夫じゃ。ぴんぴんしておるわい」

「そうかそうか、そりゃよかった」

「ああ、飛びこんで行つた時は冷や汗もんじやつたわい」

「んだんだ、俺らでさえ渋るんじゃからのう」

「まあ何はともあれ……」

「……無事でよかった……」

村人たちは司狼に暖かい眼差しを向ける。

みんながみんな司狼の無事に安堵する。

——ああ、そうか……じいさんはこの人たちの笑顔を守りたいのか

…

そう思うと自分の中で何か当てはまるかのような感触があった。

それはまるでジグソーパズルで最後のピースがはまったかのような…

…。

あれだけ激しく司狼たちを打ち付けた雨はすっかりと止み。

空は夢だったかのように青空をのぞかせていた。

番外編 お人よしのご老人（後書き）

ここまで読んでいただいてありがとうございますっ！

今回は元の世界に居た頃の司狼君と豪気さんの馴れ初めみたいな話を目指して見ました

豪気さん鹿と真正面から向かっていけるとか（汗

僕がここまで続けていられるのもいろいろな方が見て下さっているお陰です

次回からは本編を更新させて行きたいと思います

それでは感想は誤字脱字など遠慮なく申し立ててください

次の更新は？

未定ですね

疑わしいご老人（前書き）

いやあ、長い間放置してしまって申し訳ありません（汗

リアルでコース登録とかいろいろばたばたとしてしまっただけで更新できませんでした

これからまた忙しくなるので一ヶ月に二回くらいのペースで更新していくと思います

よろしくお願いします

疑わしいご老人

つらかった……。

今はハーデさん達と別れ、用意して貰っていた宿屋の一室にアルセといた。

俺は今にも腰掛が崩れ落ちそうなイスをなるべく壊さないようにもたれ掛かり、アルセはベッドに横になり少し疲れたからとちよっと前に眠ってしまった。

そして小さなため息をついてさっきまでハーデさん達との会話を整理していた。

あの空気は本当に息が詰まる。

ハーデさん達の顔を直視することも、自分が呼吸するのもはばかれるようなそんな重たい空気。

あの話の中で俺達はお互いに隠し事をしていた。

俺達は自分達の種族と目的を。

……まあその目的もごたごたしていて俺でさえ知らないわけだが。

その目的を知っているご本人はすやすやと胸を上下させて安らかに眠っていた。

本当に気持ちよさそうだな。

俺は魅かれるようにアルセに近づいていた。

血色のいいピンク色の肌。

もっちりとしている頬。

なんだろう。

無性に押してみたい。

んでも起こしちゃうかもなあ。

どうしよう……。

うん、いいや押しちゃえ。

我慢できずにアルセの頬を指で突付いた。

ふにふに――

お、なんか気持ちい。

餅をつついているかのように押すところを押し出すような弾力。

ふにふにふに――

なんか中毒性が。

起こしてはいけない。

頭では分かっているのだが止められない。

ふにふにふにふにふに――かぶっ

ん？

かぶ？

かわいい擬音と共に指が温かい何かに包まれた。

ぬめりという感触がしたが不思議と不快な気持ちにはならなかった。

なぜならアルセが俺の指をくわえていたから。

ちょー！？

痛くない、痛くないけど！

いろいろまずい気がするよー！！

俺の焦りを知ってか知らずかアルセは

「ひほう……」

眠そうに半目を開けて焦点の合っていない目でこちらを覗いた。

「ア、アルセ？」

「……はひはつてるほ？」

「いや、何……その……な？」

とりあえず苦笑いを浮かべた。

なんか無性につつきたくなっただなんて言えない。

恥ずかしくて……。

するとアルセは指をくわえたままのそつと起き上がりまだ眠そうな目でこちらを見るとちゅぱつと音を立てアルセは静かに俺の指を離れた。

俺の指とアルセの唾液が間に銀の橋を作りたらんと垂れる。

「何やってたの？」

「いや、その何だ」

「……」

無言の圧力でこちらをじーと睨みつける。

元々少々キツイ顔つきのアルセに睨まれてると少し怖い。

「……司狼？」

穴が開くんじやないかって位見られる。

しかもかなり至近距離。

「ほっぺをつつついてました」

白状した。

だって怖いんだ。

まさに蛇に睨まれたカエルとはこのことだよ。

カエル君の気持ちがあったよ。

だがアルセはその答えを聞いてさらに不機嫌になってしまった。

「そつ、私が寝てる間にそんなことをねえ」

「いや、ちょ、アルセ怒ってる？」

「怒ってないよっ」

「いや、怒ってるでしょ」

「怒ってない！」

そう言つとぷいっとそつぽを向いてしまった。

「……なんで私が起きてる時にやってくれないの……」

「え？何？」

「なんでもないよっ司狼のバカっ！」

あれ、俺なんで罵られてるんだろっ。

ちよつと悲しくなってきたぞ。

ちよつと突付いてただけなのになあ。

今度から気をつけよう。

…さて少々気まずい。

話題を変えよう。

「それにしてもグラシオさんについてどう思う？」

「え？ああ、あのおじいさん？」

「うん、そう。話をしていた時から気になっていたんだけど……」

「あ！ああ、あの人は魔族だよ？」

「魔族？」

「うんそう。外見的には人間と変わらないんだけど、ちがうのは魔力を持っているかいないかだよ？」

うん？

つまりはこういうことか？

魔力を持っていなければ人間として部類され、魔力を持っていれば魔族として部類される？

つまりはグラシオさんは魔力を持っていた？

考えたことをアルセにそのまま伝えてみると

「その通り。ただ上手く隠そうとはしていたみたい。なんていうんだろ、間違えて出て来ちゃったみたい？ほら、あの時つ、司狼が舌を火傷した時に」

あああつたねえ。

今度からちゃんと冷ましてから飲もう。

「一瞬だけだけど、魔力の匂いが一気に広がったの。ハーデさんに止められて何をしようとしていたのかはわからないけど、とにかく警戒はしておいた方がいいかもね」

ふむ、確かにその通りだ。

ハーデさん達はグラシオさんの『何か』を隠していた。

それが何かは分からない。

グラシオさん。

この町には似つかわない服装。

絵画の一部を黒く塗りつぶしたようなポカンとその空間だけ抜け出てしまったような。

グラシオさんだけが浮いているような感覚。だけど、不思議と怖さとかは感じなかった。

あの人の人柄だからだろうか。

俺は何かグラシオさんに懐かしいものを感じていた。

アルセには警戒しろと言われたけど、今度話を聞いてみよう。

それにハーデさんとも何時までも喧嘩していたくはないし、何か解決する方法はないかと俺はまた自分の世界へと入っていった。

後アルセからここに来た理由とかも聞いていなかったな。

早く教えて欲しいものだ。

疑わしいご老人（後書き）

初めましての方、始めまして^^

いつも読んでくださっている方々、ありがとうございます

今回は少々アルセとの絡みを入れて見ました

いやあもう、リア充爆発しろですよ

クリスマス近いですし、余計にです

それにしても司狼君、苦勞人ですね

いろいろ問題抱えています

自分やら他人やら（笑

さあそろそろいろいろフラグを回収しなきゃですね

司狼君の能力とかもまだ明かしてないですし……

少々頑張って更新していきたいと思いますb

それでは感想もしくは誤字脱字などがありましたら遠慮なく申し立ててください

次の更新は？

未定ですね♪

拭えない憎しみ

ここは何処だろう？

前も後ろも真っ暗。

一寸先さえ闇に包まれ、自分が今立っているのか座っているのか酷く曖昧な感覚が襲った。

温度なんてものは無くただただ暑くもない寒くもない矛盾した感じに俺はぶるつと身震いさえ起こした。

何処だろうか？

考えをまとめようとするが頭に霧がかかった様にはつきりしない。その時今いる所から少し離れた所に光が灯った。

鬼火というのだろうか儚く淡い茜色の光。

俺はその光に魅き寄せられるかのように、足は勝手に動いていた。光に近づいていく。

どんどん。

どんどん。

どんどんと……。

光に近づくにつれて自分の体に温もりが戻ってくる。

ドクンッ！

自分の鼓動が早鐘のように激しく脈打つ。

この感じ。

このぬくもりは……。

知っている。

忘れるはずがない。

何年たっても覚えている。

強く撫でてくれた大きな手。

優しく包んでくれた優しい体。

天真爛漫に花が咲いたような顔。

——父さん、母さん、初音……。

声に出そうと思っても、何かが詰まったかのように声にならない。
光に近づく。

淡い光が俺の体を包んだ。

「どうした？司狼」

その声を聞いた途端、体の奥底からジワつと衝動が込み上げてきた。
そこに居たのはダイニングで大きな机を何時も四人で囲み、今は俺
以外の三人が席についていた。

——泣きそうだった。

低く優しい声色。

俺達をいつも心配そうに見守ってくれていた。

父さん。

「何をしているの？司狼」

何時も穏やかな父さんに代わり俺達を叱ってくれた。
ただどそこには優しさが必ずあった。

母さん。

「泣きそうな顔してるよ？お兄ちゃん」

何時も俺の右肩に擦り寄って甘えてくる妹。

何度も離れると言っても離れなかった。

初音。

死んでしまったはずの家族が目の前にいる。

皆立ち尽くしている俺を心配そうに見つめている。

暖かな——大切な俺の家族。

そして突然奪われた大切な家族。

俺はそれを求めるように震える手を必死に伸ばした。

父さん、母さん、初音も俺に手を伸ばしてくる。

ああ、もうすぐで、もうすぐで触れられる。

触れ合いたい。

その光を。

温もりを……。

触れた。

家族の指に触れた。

だけど、おかしい。

暖かくない。

何故？

俺を包んでいた暖かな温もりは？

まるで死人のような……。

そう思うと指に又メリと嫌な感触がした。

ブワッ！

全身の毛穴という毛穴から嫌な汗が噴出して来る。

嫌だ。

自分の頭が何に触っているのか瞬時に理解してしまう。

見たくない。

見たくない。

見たくない。

だが俺の意思とは無関係にまるで何かに操られているかのようにギギッ、ギギッと前を見てしまう。

そして、俺は——見た。

繋いでいる指からは真っ赤な雫が滴り落ち、闇に吸い込まれていく。それが俺の腕を伝い、尋常ではない量の雫が俺の腕を真っ赤に染め上げていく。

見てしまった。

ちくしょう、ちくしょうちくしょうちくしょうっ！

俺が掴んでいたそれ（・・・）は手から先が無かった。

俺を見ていた暖かな瞳も、温もりも、笑顔も……。

全部全部最初から無かったかのようにきれいさっぱりなくなっていた。

代わりにあるのはさっきまであったとは全く逆。

冷たささえ覚える虚無。

そして更に代わりにあるもの。

それは俺より少し奥にいた。

それはズチャ、ズチャ……と嫌な音を立てながら何かをしている。
そうだな。

あれが何をしているかわかる。

分かってしまう。

あれは……俺の家族を解体してるんだよっ！？

夢にまで見た。

何度も殺そうとも思った。

だけど忘れられない。

じいさんにあつてから緩和されたが当時の記憶が鮮明に思い起こされる。

憎い。

ダメだ。

憎い。

ダメだ。

ダメだ。

憎い憎い憎い。

次第に俺の感情が一つに統率されていく。

絶対に思いたくない俺の封印したい感情。

憎しみ。

『殺せ』

何処からか声が聞こえてくる。

それがどこから聞こえてくるのか。

誰なのか、そんなことは今はどうだっていい。

『さすれば貴様に力をやろう』

俺はこの言葉が酷く正論な気がしてきた。

だけど本能ではやつを殺したい。

理性が俺に歯止めをかけていた。

やつがこちらを向く。

やめろ、それを乱雑に扱うな。

やつの手には何かぶら下がっている。

やつはそれをまるでゴミは扱うかのように雑にその辺に放り投げた。

妹にナニシテヤガルンダアアアアアアアアアッ！！

自分の体にまるで麻薬の様に快感が走る。

それは一瞬で俺の体を走り回る。

まるで生き物の様に時には激しく。

俺の体を暴れまわる。

そして俺の体はその感覚に耐え切れなくなつたかのように、自然と意識を手放した。

「うっ」

誰かが叫んでる。

「……ろっつ」

この声を聞くと酷く安心する。

俺は何をしていたんだっけ……。

家族に会ってその後……。

そうだ、その後の記憶が酷く曖昧だ。

「司狼つ、大丈夫!？」

ようやく頭が覚醒してきた。

俺を呼ぶ声。

「アルセ……」

「あ、起きた!？」

「どうしたの？」

「どうしたの？ じゃないよっ、司狼すごくうなされてたよ？」

「ホントに？」

「うん、それに……ホラ」

アルセはそういうと俺の頬に指を這わせる。するとアルセの指が湿っていた。

これは？

何故濡れているんだ？

「司狼……泣いてる」

え？

そう言われ手を頬に添えてみる。

本当だ。

確かに濡れている。

俺の目からも確かに涙は流れていた。

するとコンコンと控えめにトビラがノックされた。

俺は急いで涙を拭うと了承の意を伝えると。

「失礼します」

落ち着いた物言い。

入ってきたのはグラシオさんだった。

「少々強い力を感じたのですが……発していたのは？」

俺達は体に力を込めた。

疑っている？

だが、

「そう警戒しないでください、こんな老体です。その必要もないでしょう？」

本人はそういうがこの人はどこか油断ならない。

俺達はいつそう体に力を込めた。

「そうですか……残念です。ですが、これだけは言わせてください」
何を言うつもりだ？

グラシオさんはアルセではなく俺を見つめ、

「……大きな力に負けないで下さい……」
！？

フェンの力のことが！？

何故あなたが知っている？

問いただそうとしたがその前に、

「失礼します」

と、部屋を出て行ってしまった。

「ふう」

と俺とアルセは同時にため息をついた。

「グラシオさん……司狼を見てたよね？負けないでって、どういうこと？」

アルセが不思議そうに顔を傾げる。

だが俺はその質問に対して何も答えなかった。

『さすれば貴様に力をやろう』

その言葉が俺の頭にずっとリフレインしていた。

拭えない憎しみ（後書き）

毎回見てくださる方々ありがとうございますっ

今回は早い段階で更新できました

休日は暇なので……

さて今回の話は

完璧超人っばかった司狼君ですが、精神的にはかなり不安定です
ゆらゆらと揺れています

それがこの後の物語にどのような影響を及ぼすのか

グラシオさんは果たして何者なのか

楽しみにお待ちしております♪

感想などお待ちしています

次回の更新は？

未定ですね（笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9675v/>

お人よしのオオカミさん

2011年11月13日11時28分発行